
最強ときどき最弱。

水無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強ときどき最弱。

【Nコード】

N6016T

【作者名】

水無月

【あらすじ】

主人公の刀弥（やみ）の通う学校は、無形（イ・マテリアル）を倒すために創設された魔法戦闘学校。

そこで嫌われて溢れた二人の美少女、亜鞘（あさや）と柄沙（つかさ）と一緒に紫陽花荘と呼ばれる宿泊所で共同生活する事に……。

第1話 『最強の同級生と最弱の幼馴染み』

今、僕の目の前にはこの世界でドラゴン種にあたる一匹イ・マテリアルの無形と対面している。

体長はなんか形容出来ないくらいでかい。

牙一本が人間一人に値する位のでかさ、と言えば分かるだろうか？

そんなとてつもなくでかいドラゴンを前にしているのは。

クラスで溢れ物の僕と、溢れ者の 最強 を名乗る少女と、溢れ者の 最弱 を語る幼馴染みだった。

あれ？ どうしてこうなった？

その日の朝はいつも通りだった。

いつも通りと言ってもこの世界での俺のいつも通りだ。

そのいつも通りとは・・・

「とつとと起きなさい刀弥や！ っていうか部屋の鍵を開けなさい！
さもないとドアぶつとばすわよ！」

・・・となかなか凶暴かつ理不尽な事をしようとする少女が起こしてくるいつもだ。

何？ 女の子が起こしにくるなんて羨ましい？

まあそこは否定しない・・・否定はしないが・・・。

「とつと起きなさいって言ってるでしょう・・・が!!」

すると部屋に出入りする唯一のドアが跡形も無く吹っ飛ばされた。

「ちよっ・・・亜鞘！ お前、マジでドア吹っ飛ばすとか後で怒られる・・・のは俺かぁ・・・」

正直、溜め息しか出ない。

「そんなのあんたが鍵なんかかけるからでしょう？ っていつか起きてたなら返事しなさいよね」

理不尽すぎだろ・・・。

しかし、いつも通りの綺麗な美脚だから許す。

いきなり入ってきたこの少女、あやせ亜鞘はちょっと男っぽい名前だが、俺の通う学校で 絶壁 と陰で称されるくらいの美少女だ。

美少女に付ける名称じゃない？

いやいや、分かっては居てもどうしようも無いくらいの無なのだから仕方ない。

どこがって？ それは俺にくたばれと言っているのかな？

金色の長い髪にはゆるくウェーブがかかっていて綺麗な顔立ちには、
ちょっとした釣り目をしている。

属性で言ったら多分ツンデレ。ただしデレた事は出会って数カ月一
度も無い。

少々寝ぼけ眼で絶壁と呼ばれる所以を見ていると視線に気づいて垂
鞘が怒りだす。

まあ、いつもだ。

「な・・・朝からいきなりどこ見てるのよ!」

と顔面にいきなり蹴りをくらいそうになる。

が、まあギリギリでかわす。うん、水色。

さすがに、毎日の様にこんな体験すれば何日もしない内に回避が出
来る様にもなる。

そして、うまくすれば毎日カラフルに移り変わる布を拝む事も出来
る。

「くう! 避けるなんて生意気よ! いい? 絶対にかわさないでよ
? 絶対だからね?」

と不意をついての後ろ回し蹴りを避ける。

そして、二回目。眼福眼福。

「ああもう！ イライラするわね！」

「そんな事俺に言われてもなあ」

一体どうしろというのだろう？

っていうかどうしたらいいのか教えてほしい。

避けて喰らう以外で。

「はあ、いいわ。とりあえず下で柄沙つかさが朝ごはん作ってるから早く下りてきなさいよ」

と焼き焦げたドアを跨いでいく。

マジで後片付けどうするんだろ？ やっぱ俺？

っていうかそれだけならドア前で言うだけで済む話ではなかるうか。
(起きなかったの俺だけ)

とか思っても仕方ないので俺も亜鞘の後を追って下りていった。

下りてすぐに眼に着いたのは普通の朝ごはん。

スクランブルエッグにサラダ、そしてトーストという一般的な物だ。

先に下に下りていた亜鞘は先に食べ進めている。

そして、その隣には亜鞘の食べる姿を見てニコニコしているのが幼馴染みの柄沙だ。

「おはよう柄沙」

「おはようございます刀弥様」

家事は出来るがその他が普段は全く出来ない幼馴染みは、いつもの様に笑顔を浮かべている。

ついでに『様』づけなのは俺が言わしている訳ではない。勝手に付けてきた。

綺麗な長い黒髪が腰の高さまであり、眼はたれ目。

あまり飾り気がない事が特徴と言えば特徴の幼馴染み。属性もそのまま幼馴染み。

さて、多分皆も疑問に思っているだろうが、なぜ俺が美少女二人と共同生活を送っている事なのだが。

正直な話は、ただ嫌われ者なんだよ。

クラスの男子に、女子に、教師に嫌われている。

そんな嫌われ者の俺達が追いやられた先が、この紫陽花荘だっただけだ。

そこから始まるのが魔法戦闘学校の溢れた生徒の話である。

第1話 『最強の同級生と最弱の幼馴染み』（後書き）

ド素人なので感想・・・っていうかアドバイスがあればお願いします。

第2話 『嫌われ者の憂鬱な学校』

俺達は嫌われている。

誰に誰かにと云った個人的な嫌われ方じゃなく全体的に嫌われている。

容姿が良すぎる、性格が悪すぎる、強すぎる、弱すぎる。

そんな嫌われ方は学校で如実に表れる。

クラスでの俺のポジションは当然の様に片隅だ。

別段それを意識した事も気にした事もない。

俺は一度それだけの事をしでかした自覚がある。

溢れるだけの自覚がある。

この学校はかなり特殊な学校だ。

名称が『魔法戦闘学校』と言う時点で某ひたいに傷の少年を彷彿させる程だ。

魔法はマジ物の魔法。

俺達は入学試験時に一枚のカードを渡される。

そのカードが物質紙だ。マテリアルカード

このカードは人格を投影し、それぞれ個人によって違う魔法を発動させる。

朝に亜鞘がドアぶつ飛ばした時に使ったのは、このカードによる魔法だ。

アウオイダンサー
俺は回避者という魔法と吸収ドレインという魔法が使える。

これまた朝、亜鞘の攻撃もこれを使えば簡単に避けれるのだが・・・
カードが鞆の中だったんだよね。

慣れてたから避けれたが実際喰らった時があるから言うけど、めっちゃ痛いよ？

閑話休題。

なぜ、こんな魔法が必要なのかと言うと、まあそれぞれ力が欲しいだの色々あるだろうが本質は戦闘。

イ・マテリアル
無形と呼ばれる生物。

生物と言っても、この世界には普通は存在しない生物。

他にも合成獣キメラやら複合生物コンプレクス・オーガニズムやら様々だが、この学校では無形を通して
いる。

形無き物。それはいくつかの生物や物体が混ざりあった形状をしている。

無形は魔法核があり、その核を中心に形成されている。

人にも魔法核はある、まあ力の源やら精神力やら言われるがゲーム
マジックポイントでのMP見たいな物だと思ってくれればいい。

んで、その無形は常に災厄をなし、環境を破壊する。

そして、時に人さえも襲う。

そんな無形を破壊、消滅させるための戦闘員を育成させるための学校がこの学校だ。

更に特殊なのは週に3回ある実践授業。

これは世界中に蔓延っている無形を授業として生徒に倒させる。

まあ生徒にも力の差はあるのでランク付けされておりA〜Fまで存在する。

ついでに俺の今のランクはEランクだ。

俺の魔法は戦闘向きでは無い。

吸収も範囲は広いが吸収速度がかなり遅いのであまり使えない。

いうならば弱毒みたいな物だ。

そんな俺が倒せる無形なんて本当にE・Fランクの小規模無形くらいだろう。

ただ、どんな無形でも倒せば報酬が出る。

お金だったり道具だったりするし、時には学校の単位だったりもする。

だから割とこの実践授業は重要だったりするのだ。

つとまあ説明終わり。授業も始まったし、ゆっくり寝るかな。

第2話 『嫌われ者の憂鬱な学校』（後書き）

後書きって書いた方がいいのか若干疑問だったり。
間違ってる所などあったら指摘していただきたいです。

第3話 『最強は理不尽の塊』

学校での授業はつまらない事ばかりだ。

魔法はそれぞれ違うから授業の仕様は無いし、無形の授業も説明ばかりで実践の方がよっぽど役に立つ。

だが、ここも学校なのでテストがある。

なんとも言い難いが俺の成績はかなり悪い。

まあ、これだけ授業をろくに聞いてなければ当然だ。

なので実践授業でどうにか単位を取っているのだが……。

「ねえ刀祢、柄沙！　こんなのがあつたわよ！」

つと亜鞘が教室で元気よく俺達に一枚の依頼書を見せつける。

内容は……。

『無形・ドラゴン種：村の近くの洞窟にドラゴン種と思われる無形を住人が発見。祠として使われていて、村に取っては宝と言われる程の文化財だ。早急に無形の排除を要求する。』

一通り文章を読んでみたが……。

「なあ亜鞘、ドラゴン種のランクって最低でもいくつだ？」

「え？ えーっと・・・Bだったかしら？」

「そうだ、Bランクだ。じゃあ俺は？」

「Eランク」

「無理に決まってるだろ！！」

こいつはどうやったら行けると思ったんだ？

ってかランク不足で受ける事すら出来ないんじゃないのか、これ。

亜鞘は何も微塵に思っただけなのか、絶壁を強調しながら腕組みをする。

「大丈夫よ、だってあたしが居るもの」

「・・・・・・・・」

自信満々に語る亜鞘は確かに最上級のAランクだ。

だけどなあ、Aの亜鞘とEの俺とFの柄沙だし。

合計ランクDだし・・・。

「刀祢様、ここは受けるフリだけしておきましょう。私どものランクでは審査には通りませんでしょうし」

まあ、確かに柄沙が耳元で言う通り、審査なんて通るはずも無いだろうし。

「ここでもめるのも面倒だし、了解だけしてやるか・・・。」

「分かったよ、受けてやる」

「私も受けようと思います」

「うんうん、良い返事ね！　で見てほしかったのはこっちよ！」

『報酬：無条件進級、村長から特別報酬有り』

「無条件進級！？」

「そうなのよ！　これさえクリア出来れば、後は寝てても進級出来るわ！」

と言う亜鞘だが、こいつ常に成績トップでこの依頼受けなくても進級出来るだろう。

そこで分かった。こいつが俺達にこの依頼書を持ってきた理由。

亜鞘は俺達が進級出来るようにしてくれているのだ。

成績も悪くランクも低い俺達のために。

そう思うと行ってやりたいとも思うのだが、どうもランク的に無理な事が申し訳なく思え・・・

「ああ、後言い忘れてたけど、あたしが居るなら後のランクはどれだけ低くても構わないって」

「え・・・ええ・・・」

「って事で『受ける』って言ったわよね？ それじゃ決まりね。明日の朝からだから、しつかり準備しなさいよ！」

と亜鞘はスキップ気味に教室を去っていった。

「す、すす、すみません！ 刀祢様！！ 私が安易に了承した方が良かったせいで」

ぺこぺこ謝る柄沙の胸が上下運動する。

質感と存在感が亜鞘とは比べ物にならないな。

「いや、多分関係無い。強いて言うなら、成績の悪いのが悪いんだろっなあ・・・」

ランクEとFがランクBの無形と戦うとなつて、自分の危機的状況に顔を真っ青にさせる俺と柄沙。

正直、俺もお前と1ランクしか変わらないからなあ・・・。

どうしようもなく柄沙の頭を撫でて慰めるのだった。

第3話 『最強は理不尽の塊』（後書き）

感想、常に求むです。

単調ながらそれくらいしか言っ事が無い。

第4話 『進めば進む程、不安』

さて、半ば無理やりだが依頼を受ける事になった。

相手はドラゴン？ 全く、名前を聞くだけで俺の寿命が減りそうだ。

で、村へと向かうのだが・・・。

足取り軽くスキップする亜鞘の腰回りにある布がヒラヒラして目線が・・・。

「亜鞘さん、何故このような山奥にスカートなのでございましょう？」

「えっ？ だって山奥に行くんだし出来る限り軽い方がいいでしょ？」

そういう亜鞘の荷物は確かに少なく軽そうだ。

けど、絶対スカートなんかで行ったら後で面倒な事になるのは分かり切っている。

オチが見えて若干溜め息をついた。

しかし、それに比べ柄沙は少し多いのではないだろうか？

「っていつか、なんで柄沙は荷物がそんなに多いのよ？ 多分滞在日数も2日か3日よ？」

そういう亜鞘だが、実際ドラゴンなんて相手してたら普通それだけではすまないんだけどな。

依頼は最大一週間までとされてはいるとしても、基本は1日2日で終わるのを前提として依頼書がある。

当然の事ながら学生の本業は勉強にある、っという事らしい。

「亜鞘さんが少なすぎるのですよ。私の場合は衣類が大半ですが他にもいくつかお薬を・・・」

「ああ、『秘薬』って奴ね。どれほど効果があるのか分からないけど期待してるわ」

「はあ、まあそれほど期待しないでください。料理と同じような用法で作っているのうまくいってますが基本的に家事以外は苦手なので」

「はいはい、分かってるわよ！　っていうか足止めない！　まだ後2時間は歩くんだからしっかりしなさいよ！」

いつもの様にマイペースに亜鞘が物事を進めていく。

別段気になる事は無いが、学校を離れるにつれ機嫌が良くなってるような気がしないでもない。

いや、それは柄沙も同じか。

学校ではあんまり喋らないしな、柄沙は。

「刀祢！ 何してんのよ、置いてくわよ？」

「はいはい、今行きますよつと」

とりあえず今はこいつ等の機嫌を損なわないようにしないとな。

「あーっ！っ！ もっ！ サイアクツ！！」

「だから言いましたのに」

村ついて早速部屋へと案内された俺達だが、いきなり亜鞘がこんな状態なのは当然。

「なんで、こんなに虫に刺されてるのよ！！」

スカートで山奥というある種の自滅行為のせいだ。

やれやれ、という顔をしながら俺が鞆から虫刺され用の痒み止めを取り出す。

「ほら、塗ってやるから足出せ」

「そ、それくらい一人で出来るわよ」

と足をもじもじさせる。

全くもってめんどくさい。

「いいから、ほらニーソ脱いで」

「し、仕方ないわね」

と、さらけ出された足は白く綺麗に伸びた美しい脚線美を誇っていた・・・が。

所々にある虫刺されが台無しにしている。

つたく・・・と思いながらも痒み止めを塗ってやる。

「つめっ！ あ、あっ・・・。ひゃん！」

なんすかその色っぽい声は。

俺は本人が塗りにくいであろう脛あたりを入念に塗る。

「ああ・・・、うんっ」

反応が鈍いな。

では、もう少し上に・・・。

「刀祢様？ 何を血走った眼で薬を塗っているのをごさいますしょう？」

・・・。

ギギギギと油の点してない機械の様な動きで後ろを見ると。

そこには冷やかな冷気を放っているかのようなオーラがあり。

幼馴染みの滅多に見る事のない絶対零度の冷笑がそこにはあった。

第4話 『進めば進む程、不安』（後書き）

いつもながら感想求む。

とか言ってもまず見てくれる人が少ないっていつかほぼ居ない状況で・・・。

どうしたらいいのやら。

亜鞘をつまぐツンデレにしたいんですが・・・。

なんともつまぐいきません。さてはて、どうしましょうか。

第5話 『危険と隣合わせ』

村での一夜はかなりデンジャリーな夜だった。

何が危険って？ 当然俺の理性と命がだ。

なぜなら小規模な村だから部屋が一室しかなく、全員が同じところで寝なくてはならないからだ。

これは健全な男子ならば発狂し、過ちを犯しかねない。

いや、そんな事しようとした時点で焼却処分決定だ。

まあ、俺は当然命が惜しいからそんな真似しないがな。

えっ？ 何？ チキン？ おいしいよね。

正直、特に困ったのが亜鞘だ。

亜鞘は寝起きが良い割に寝像が悪い、逆に柄沙は寝像はいいが寝起きが悪い。

双子でも兄弟でも無いのに、なんとも正反対な奴らだ。

寝像がいい柄沙は布団に入った後ピクリとも動かなくなるのだが。

亜鞘は布団の中でも絶えず忙しく動くせいでパジャマが乱れる。

へそがチラついて仕方ない。

だから俺は常に煩惱を打ち消さなければならぬのだ。

バレなきやいいだろ？ ふう、全く無茶言ってくれ。

寝像良く寝ている柄沙も、寝像悪く寝ている亜鞘も。

安らかに眠っているのに、泣いてるんだよ。

そんな奴らに何かしようって言うんなら、俺がそいつを消す。

こいつらが寝ている時に泣いてるのを知ったのはつい最近だ。

だけど知った時に俺は一人で勝手に誓った。

いつか泣かずに眠れるようにするって。

まあ、かつこつけても女子が同室で寝ている環境のせいで、緊張してほとんど眠れなかったんだがな。

そして、朝になり亜鞘も柄沙も眼を覚ます。

眼を覚ました後は村の人が用意してくれた朝食を取り洞窟へ向かう準備をする。

当然着替えをするって事でその部屋から追っ払われ、まだ日が昇ってまもない太陽を拝むのも何回目になるだろう？

準備が終わり村長達に礼をし、依頼内容の確認をしてから洞窟へと

向かう。

「さあ！今日は気合入れていくわよ！」

つと毎日気合が入ってるとしか思えない亜鞘がさらに声を張り上げ前方を歩く。

「分かっていますよ。ですが、もうちょっと速度落としませんか？たどり着く前に私の体力が・・・」

その後ろを付いていく俺と亜鞘はそのテンションに振り回される。

ここまでがいつも通りだった。

そして、ここからが日常を外れた異常だった。

洞窟へと辿りつく頃には、柄沙の体力はすでに尽きかけていた。

まあ、昨日も村に着くなりすぐ寝ちまつてたし。

基本的に運動音痴で体力皆無だから仕方が無い。

それに比べ亜鞘は未だにピンピンしてるし。

俺も柄沙程じゃないにせよ少し疲れた。

なので『休もう』と提案したのだが。

「却下」

という短い返しで取り消された。

まあ、いつもこういう依頼は亜鞘が単独で突っ込み、相手を壊滅させているのを俺達はただ見るだけだからなあ。

何か言えた立場じゃないな。

そういう訳で仕方なく休憩せずに洞窟の中へと向かう。

中に入って3分程で多分一番奥の空洞となっている所に入った。

多分一番奥、と言ったのは当然。

俺達の目の前に家一軒を越す程のサイズの無形が寝ているからだ。

そついや言い忘れた気がするが。

無形も生物が混ざっているため他の動物とそう変わらない行動を取る。

だが、唯一他の動物と違うのが。

“人間を見れば襲う”という事。

確かにどの動物も縄張りを荒されたり、襲われたり、極度の空腹状態だったりすれば人間を襲う。

だが無形はただ目の前に人間が居るだけで襲う。

これが無形を討伐する最大の理由。

話を戻すが当然ながら普通の動物のように寝る。

ただ、俺達はいいつを仕留めないといけない。

そのため亜鞘が太ももに巻いた専用のカードケースから物質紙を取り出す。
マテリアルカード

取りだしたカードは亜鞘が触れた瞬間に赤色へ変色する。

そしてカードを無形の方へと向けるとカード先から炎が迸る。

「フレイムファイヤ
“ 火焰砲火 ”」

と呼ばれるそれは丸みを帯び、ソフトボールくらいの大きさからバスケツトボールくらいの大きさへと肥大する。

更に肥大し続け、直径が自転車のタイヤくらいになったところで無形が眼を覚ます。

「燃え尽きなさい！！」

亜鞘は寝覚めの無形に一発の火球をぶち込んだ。

第6話 『今へと至る経緯と過去』

亜鞘はドラゴン種の無形に初撃の魔法を決める。

が、それでも無形は少しのけ反るようにして、それだけだった。

無形は傷はついていても血は流れない。

この世の生物と見なされてない無形は傷を負えばその部分は風化し、砂と化する。

無形は後ろについた屈強な尻尾を大きく振り、叩きつける。

亜鞘はカードから炎を出せる、ハイ・スプレッター気炎者。

だが、それだけではない。

エアークンデション
空気調整がある。

空気調整はそのまま、空気の中の成分の量を調整する。

そして今、亜鞘はこの洞窟内の空気を酸素で充満させようとしている。

いつもなら初撃で葬っているが今回はそうはいかなかった。

サイズがサイズだからだ。

僕は亜鞘が一人戦っている姿を見るのはこれで何十回ともなる。

だから分かる、これは苦戦している。

亜鞘は“血を見てはいけない事情”があるから実際、先頭で戦うような立場じゃないし。

そもそも亜鞘は火球を放つ中距離タイプだ。

苦戦もするに決まっている。

俺は隣で震えている柄沙を見て「はぁ」と重く溜め息を漏らす。

いつもいつも、見てるばかりじゃダメだよな。

思い立ったが吉！

俺は早速無形に向かって走り出した。

「あつ、と、刀祢様！？」

一人残されるのが心配なのか寂しそうな不安そうな声を上げる柄沙。

「大丈夫、すぐ戻ってくる」

まあ、亜鞘次第になっちまうけどな？ と心にだけ思った。

無形の前に立つとその巨大さが更に際立つ。

さて、こいつは一体何と混ざってるんだろうな？

ドラゴン種の無形に決まって入っているのは爬虫類と鳥類。

この無形はそれにプラスして、あれは・・・銀？

鋭く尖った爪や牙は眩い銀色に輝いている。

鉱物が混じってるのか・・・、そりゃあんまり火が効かない訳だ。

無形は僕の存在に気付き、尻尾の先を僕に突き刺すように突いてくる。

アブオイダンサー
回避者発動。

無形の攻撃をほぼ紙一重で避ける。

地面を突き刺した時に飛んでくる破片もほぼ避けきる。

これが回避者。

反射神経と動体視力の大幅な強化。
エンチャント

俺を狙った単体攻撃ならほぼ避ける事が出来る。

だが、この光景を見てよく思わない奴がいた。

「刀祢！ あんたなんで前に出てきてんのよ！ あんたはEランクでBランクに勝てる訳無いんだから下がってなさい！」

当然の事ながら亜鞘だ。

俺少しムツとする。

「勝てる訳無くても、お前が酸素を充満させる時間かせぎにはなるだろ！」

「そんなの必要無いのよ！ あたしを誰だと思ってんの？ Aランク魔法使いよ？」

「だからなんだってんだよ！ 苦戦してると思って加勢しに来たんじゃねえか！」

苦戦と言葉を聞いて亜鞘の顔が歪む。

「あたしが苦戦！？ そんな訳無いじゃない！ こんな奴今すぐ可燃ゴミに……」

フツと気付く自分達が攻撃されていない事に。

俺と亜鞘が口論して目を離れた隙に無形が向かったのは出口の方。

すなわち、柄沙の方だった。

「あつ、あ……」

柄沙はすでに放心状態で腰が抜けている。

クソッ！ と悪態をついても変わらない。

もっと思つからない所に移動させとくべきだった、と思つても何も起きない。

全力ダッシュで柄沙の所までたどり着いて、そのまま攻撃をかわすしかない。

だが、すでに遅かった。

振りあげられた尻尾は柄沙まで一直線に下ろされる。

振り下ろされる最中に亜鞘は無形の足元にフレイムファイヤ火焰砲火を当てる。

が、攻撃虚しく。無形はほぼバランスを崩す事もなく、ズドン！とけたたましい音をたて柄沙を押しつぶした。

もくもくと砂ぼこりを巻き起こす光景に、俺は足が止まった。

砂ぼこりが舞い上がる中、僅かな隙間から細長い物が見える。

そして、徐々に砂ぼこりが晴れていき、鮮明に見えるソレを俺は凝視した。

それは血だまりの中、一本の腕だけが落とされていた。

『柄沙が死んだ』

人の死に関わる事はすでに1回だけあった。

それは別段仲が良かった訳でも無く、普通の知り合い程度の奴だった。

人の死に価値を付けるつもり無い。

だが、幼馴染みの死は、度を超えたショックを俺に与えた。

頭の中がぼんやりとして、意識が遠のいていく。

意識が遠のいていく代わりと言わんばかりに、心の奥底から冷やかな自分が無情に表れるのを感じる。

心に響く声は無情に非情。更に冷静で血を求める衝動。

“交代だ”

俺はそいつに意識を預け、悪夢へ堕ちた。

第6話 『今へと至る経緯と過去』（後書き）

実際友達に読んでもらおうにもファンタジー物って若干恥ずかしいよね。

『自信が無いのかよ』とか言われたら終わりだけでも・・・。

まあ、辛口にでも言ってもらえたらいいよね。悪口じゃなく。

第7話 『過去の思い出は血』（前書き）

これは亜鞘視点からの話になります。
色々と混雑してますが何卒ご容赦を。

第7話 『過去の思い出は血』

亜鞘 SIDE

目の前の光景に目を疑うしかなかった。

血だまりの中、一本だけ残された腕を見て、あたしは動けなくなつた。

急に体が震えだす。

酷い嗚咽でむせかえる。

つい10分程前に疲れながらもこっちを見て、微笑む柄沙を思い出す。

あたしはこの走馬灯の様な物を見てさらに昔の記憶を思い出し呟いた。

「ああ、あたしまだ・・・」

それは亜鞘の両親の事。

無形に殺された、両親の昔の思い出。

思い出し、笑いが込み上げてくる。

何にも成長してない自分を笑いたくなる。

両親が目の前で死に、自分が血液恐怖症になったあの日と同じ様に。
柄沙が目の前で死んだ。

ハッと意識を戻された。

なぜなら刀祢が柄沙の腕の方へ向かってただ歩いて行ったから。

悠然と、ただ何かを見据える様に。

「刀祢！ 何やってんのよ！ 下がちなさい！」

私の声は虚しく無視され、刀祢は歩く。

足で踏みつぶされかけても、尻尾でなぎ倒されそうになっても、全てをかわしきる。

無形にどれだけ攻撃されようと傷一つ付かずに歩く。

その異様な光景に寒気がした。

血液を見たからでも、死を思い出したからでもなく。

ただ歩く刀祢の姿に寒気がした。

そして、何事も無かったかのように柄沙の腕まで辿りつき、その周りに滴っている血を啜^{すす}った。

刀祢は血を勢いよく啜った後、口元を拭う。

刀祢の特徴のあまりない日本人らしい黒髪と黒目は紅く染まり、異様な雰囲気醸し出す。

刀祢はあたしの顔を見て、悲しそうにフツと笑い、物質紙マテリアルカードの上に掲げる。

不意に意識が薄れていくのを感じる。

徐々に力が抜け、眠気に襲われる。

そして、意識が途絶える寸前に目にしたのは。

砂の塊と化した無形が風と共に崩れる瞬間だった。

第8話 『終わり良ければなんとやら』

夢の中で見たのはいくつもの虐殺の光景。

一つは檻の中。

過剰な程の鞭打ちを受け、生傷の絶えないまま息絶えた、獅子の光景。

二つ目は洞窟の中。

何人もの人間から物質紙マテリアルカードによる炎で焼かれる、蝙蝠の光景。

三つ目は処刑台の上。

一人の女の子が肢体を鎖で拘束され、晒されている中。

一人の男が泣きながら彼女の首元に剣ツルギを振るう。

死ぬ間際の女の子の顔は、笑顔の光景。

深い悪夢から目が覚める。

当然の事ながら夢見は最悪で寝覚めも砂まみれで最悪だ。

冴えない頭を回転させる。

「砂？」

目の前には洞窟を埋め尽くすような量の、砂の山があった。

丁度、ドラゴン種イ・マテリアルの無形。一体分。

そこまで来てようやくここまでに至る経緯を思いだした。

「そうだ、ここで柄沙が死んで。俺が気絶して・・・！！ 亜鞘！」

何の音もしない洞窟で亜鞘の声がしない事に気付き立ち上がる。

手にグツと力を入れる。

むにゅ。

「むにゅ？」

力を入れた俺の手には何か白玉よりも柔らかく、すべすべして、人肌のように暖かい感触が・・・。

ん？ 人肌？

「うつ・・・うつん・・・。」

下からのうめき声に思わずのけ反る。

砂まみれになりながら体を起こしたのは、柄沙だった。

「柄沙・・・な、なんで・・・」

生きてる。と聴く前に挨拶された。

「あつ、刀祢様。おはようございます」

と目を擦りる柄沙の腕は確かについている。傷一つ無く。

しかし、砂まみれの手で目を擦ったので。

「うつ、目に砂が・・・」

と自爆っている。

そして、起き上ったので気付いたが・・・。

柄沙は一系まとわぬ生まれたままの姿で座っていた。

って事は・・・さっきの感触はまさか・・・あの豊満でなお且つハ
リのある二つ山！？

おおおう！！　なんですぐに離しちまったんだ俺え！！

と自分の右手首を握りながら自己嫌悪に陥る。

柄沙は自分が今、裸なのにも気付いていないし。

ああああああ！！　それは、人生最大の幸福を逃してしまった

かのような喪失感だった。

「何やってんのよ！ この考え無しの変態のエロ魔人のミジンコ刀祢！！」

それはどういう生物だよ。

と振り返ったが最後。

すでにほぼ零距离にまで俺の顔面に近づくスニーカーが、再び俺の意識を沈めましたとさ。

「先に説明しなさいよね！」

その言葉を聞いたのは俺が再び2時間眠って、起きてから5分後。

『どうして柄沙が生きてるのよ！ っていうかなんでは、裸なのよ！！ そして、泣かしてるんじゃないわよ！！！！』

と怒涛の捲し立てで俺はしばらく無駄に削られるだけの精神攻撃を喰らった。

少しして落ち着いた亜鞘に起きたら柄沙が生きていて、しかも、裸だったと説明する。

後言つと、泣かしたっていうのは柄沙が目を擦っていたのを見て亜

鞘が勝手に誤解しただけだ。

ついでに当然だが、天にも昇る感触は内緒だ。

そして、最大の疑問を柄沙に投げかける。

「柄沙、あんたには失礼な質問かもしれないけど。何で生きてるの？」

柄沙の答えは。

「えっ？ 亜鞘さんが助けてくれたのでは？」

と逆に質問だった。

確かに亜鞘は無形の攻撃を柄沙が受ける前に火焰砲火フレイムファイヤを当てたが軌道は変えられなかった筈だ。

それに柄沙の腕だけが落ちている光景も確かに見た。

だが今の柄沙にはちゃんと両腕がある。

て事は実は柄沙には攻撃が当たって無くて、俺達は当たったと思っただけで変な幻を見ていたって事か？

いや、それも考えにくい。

亜鞘も柄沙の腕が落ちてるのを見たって言うてるし。

「あれ？ そういや無形は誰が倒したんだ？」

周りを見ると柄沙の頭の上に『？』があるの見える。

亜鞘は何か考えていたが。

「分からないわ」

と答えるのだった。

誰がどうやって倒したのかも不明・・・か。

まあ、今回は無事（？）だったから良しとするか。

第8話 『終わり良ければなんとやら』(後書き)

話数間違えてました；

他に何か誤字・脱字があれば教えてください。

第9話 『小さな来訪者』

俺達は一度村に戻り依頼報告したのちに学校へと帰った。

学校での報告も済ませ先生から「今日はもう帰っていいぞ」と言われたので、素直に従い紫陽花荘へと戻った。

紫陽花荘は基本的には自立するための制度が取られている。

炊事、洗濯などの家事も自分達でするし、鍵の管理だって自分達でしている。

一応紫陽花荘を担当している先生も合鍵は持っているがほとんど使われる事は無い。

よって、ここは俺と柄沙と亜鞘で住んでいる事になる。

空き部屋は当然の様にあるのだが・・・。

まあ、使われる事は俺らが卒業するまではまず、無いだろう。

俺は2階を一人で占領している形になっている。

両隣とも部屋は空いているのでかなり静かだ。

俺はそんな空間で昨日、今日の疲れをとっていた。

「刀祢、今いい？」

亜鞘が俺の部屋の中から声をかける。

ドアが無いから普通にノックもない。

「いいけど、どうかしたのか？」

「どうかした・・・って程じゃないんだけど・・・」

亜鞘は渋る様な仕草をする。

夜に映える金髪ウェーブがふんわり上下する。

「あんたは今日の事、どこまで覚えてる？」

「今日の事？」

それは朝から夜である今までだろうか？ それとも洞窟に入ってから出るまでだろうか？

理由は分からないがそれとなしに前者の方を答える。

「朝は洞窟へ行く準備をして・・・」

「ああ、そっからじゃなくて洞窟からよ。鈍感」

絶対に俺の責任じゃない。

明らかな亜鞘の説明不足のせいで罵られたが気を取り直し話だす。

「洞窟の奥まで入って、無形と戦って、柄沙がころ・・・つぶ・・・
ああ！ 良い言葉が出ないけどやられる所を見て気絶したから・・・」

「ふうん」

「まあ、そこから先はお前も知ってるだろうけど柄沙が生きてて、
誰かさんがとび蹴りしてきて再び眠る事になっちまったんだけどな」

と少しは反省してもらいたいのので目を細めながら言ってみる。

とか言ってもこいつはすぐに開き直って「そんなの誤解されるあん
たが悪いんでしょ！」とか言ってくるに違いない。

まあ、これで亜鞘が態度変えたら明日は嵐だな。多分、急激に発生
するだろうな。

「ご、ごめんね刀祢。やっぱり痛かった？ あの時あたしも早合
点しちゃって・・・」

・・・・・・。

訂正、明日は天変地異が起こるかな？

「ま、まあ気にするなよ。実際なんてことないし」

俺もらしくなくフォローしてる・・・明日は絶対なんかあるな。

「そう、ならいいのよ。悪いわねこんな夜に起こして」

「まだ11時半だ、そこまで遅くもねえよ。おやすみ」

「おやすみ」

明日に若干の不安を抱きつつ眠る事になった。

っていつか結局亜鞘は何が聞きたかったんだ？

翌朝はすこぶる快調で、朝から若干足取りも軽かった。

それは当然、朝紫陽花荘で担当の先生が依頼解決の報告をした事で、無条件で進級出来るって事が俺の脚を軽くさせる。

いやゝ、ほとんど何もしてないんだけどな？

マジで亜鞘には感謝しないとな。

学校って素晴らしいね！！

「どうしてこうなった・・・」

頭をかかえる俺の近くにはキャッキャキャと芝生の上を走っ

たり、転がったりと忙しそうなお子供が一人。

いや、俺も実質子供な訳だが。そういう事ではなく小学生低学年くらいって意味の子供という意味だ。

なぜか授業を抜ける許可が出たので、お言葉に甘えて落ち着いて考えれることに来てみる事にした。

その一つがこの植物園で、ついでにもう一つ図書室にあるベランダも俺の好きなスポットだ。

と、いつの間にか子供がこっちに向かって手を振っている。

振ってくるので振り返ってあげると子供はこっちに向かって走ってくる。

そして俺がいるベンチまで来て。

「パパ！　パパもいつしよにあそぼ？」

俺は再び頭を抱え、こうなった意味不明な経緯を思い出す。

ああ、マジでどうしてこうなった・・・。

第10話 『子供は誰のもの?』

朝は爽やかな気分のまま登校し、気分が沈む教室に「おはよう!」と爽やかに挨拶をした。

男子からの「うわぁ」という引く声と女子達の「何あれ、キモッ」とか言う声も全然気にならない。

ハッハッハ! 今日は朝日が気持ちいいね!

とまあ明らかなドン引きが俺を歓迎した訳だが。

問題はこの後の朝のHRだ。ホームルーム

先生が微妙な面持ちのまま教室に入ってくる。

そして俺の方を見て更に微妙な顔をする。

俺の顔に何かついてます?

「えゝ・・・。今日は迷子のお知らせがある」

先生からの報告に教室がざわめく。

そりゃ、迷子の報告とか意味わかんないしなあ・・・っていうか誰だよ。

っと思っていると教室のドアが再び開く。

入ってきたのは銀色の輝かしい艶のある髪に、それに合わせたかのような金色の瞳。

小さく小学生の様な体躯に、飾り気のあまり無いワンピース着た女の子。

当然、一見ただけで分かるが転校生では無いだろう。第一。

「パパいますか？」

とか言う人が転校生な訳が無い。

っていうか絶対この子が迷子じゃん！ 『パパ』とか言って探しまわってんじゃん！

先生がその場を納めようと「静かに」と疲れ声で言う。

苦勞してるな、先生も。

「パパ！！」

っと女の子が勢いよく走りだす。

えっ？ この中に居るの？ と言ったどよめきがクラスを覆う。

そして、机をひよいひよいと避けながら一直線に俺の机に向かってくる。

俺はちよつと周りを見渡して見たがなぜか視線が俺に集中している。

何この空気・・・俺決定なのか？

と出来れば予想を裏切ってほしいと願ってみるが、そんなことも露知らず女の子は俺の机の前で止まる。

ジトーつとした嫌な視線を全身に受ける。

女の子は気にした様子も無く。

「パパー!!」

っと言って俺に抱きついてくる。

クラスに静寂が訪れる中、先生が空気を読んだのか授業を抜けてもいいと言い出してくれた。

俺はその言葉に甘えて女の子の手を引き教室を後にした。

後ろからの「ロコン・・・」「ペドフィア・・・」なんて全く聞こえないぞ!!!

はあ虚しい。

そして、今に至る。

はあ・・・クラスが更に気まづくなっただなあ。

時間として、今は一時間目の物理の時間。

授業中は誰も外に出てこないから、誰かに見られて騒がれる事も無いだろう。

当然、今の俺見たいな不良的な奴は別として。

とまあこんな事をここでもばやいていても仕方ない。

まず聴かなければならない事がいくつもあるし・・・少しづつ聴いてみるか。

「ねえパパ、どうしたの？ あそばないの？」

と少し不満そうな、そして残念そうな声を出す少女は小さな手で俺の手を握る。

ああ・・・ヤバい。□○コンに堕ちそう。

つて！ 正気を取り戻せ俺！！

「いや、遊びたいのはやまやま何だが一旦君に聞きたい事があるからさ。とりあえず聞いてくれる？」

少女は歯切れよく「うん！」と答えてくれた。

「それじゃ、まず名前を覚えてくれるかな？」

「えっとね、い・・・ま・・・りあ？」

と今度はやけに言いにくそうに、しかも顎に指を添えて考えながら言う。

そして何故に疑問形？

「イマリアが良い名前だ。次からそう呼ばせてもらおうよ」

「うん！」

返事は一人前だな。

さて、こっからが本題になる。

「イマリアのパパは俺なの？」

「うん！　へんなおにーさんがここにパパがいるっていったの。あとはおいでわかるって」

「そっかあ匂いで分かるのかあ」

匂いって・・・お前は犬か！！

っとツツコムのは置いといて・・・。話を進めないとな。

「イマリアはどこから来たの？」

「・・・わからないの」

「じゃあ、ママは？」

「えっとね、このがっこうにいるんだって！」

さて、困ったな。時折辛そうな顔するし。

まだ見ぬママも居るみたいだし・・・はあ。

まあ分からないのならしょうがないよな。

「ありがと、だいたい分かったよ。それじゃ遊ぼうか！ 何して遊ぶ？」

イマリアはペアと顔を明るくさせ、植物園の花で作った冠を掲げて。

「これをいっしょにつくるの！」

と楽しそうに言うのだった。

後で看板に気付いたが、イマリアが笑顔のなので黙ってそのまま遊んだ。

注意：植物園の植物は抜いたり千切ったりしてはいけません。

第10話 『子供は誰のもの?』 (後書き)

11話目から少々長めに書きたいと思います。
若干1話が短く見えるので・・・。

第11話 『子供の事情』

久々に子供と遊ぶという懐かしい体験をしたのもつかの間。

休み時間になってから1分しない内に亜鞘と柄沙が、俺の居る場所に走ってきた。

おかしいなあ、居場所とか何にも連絡してないのになあ。

もしかしたらこいつらも何かしら匂いでも辿ってきたのか？

と、どうでもいいことを思いながら息一つ乱さない亜鞘と息絶え絶えの柄沙を見る。

亜鞘と柄沙は俺とイマリアを交互に見て微妙な顔をする。

「あ・・・あんた・・・□r・・・」

「違うから！ 見たまを口にするんじゃない！」

亜鞘は変わらずに俺の事を訝しんだ目で見てくる。

いや、本当に違うから。マジ信じてくれよ。

柄沙は息を整えるので時間がかかっていた様でやっとしゃべり出したが。

「そうですね！ 違うに決まってるじゃないですか！ 刀弥様はペ
d・・・」

「でも無い！」

クラスの奴にも言われた後なのに・・・。

ていうか柄沙に至っては確信持つて言ってるのが気になるんだけど。

俺、そんな事しましたっけ？

いきなり気分を削がれたが、まあ仕方ない。

「さ、イマリア自己紹介だ」

「はい！ イマリアです！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

『だけ！？』

気持ちは分からなくも無いが実際、俺が分かる事だっただけだし・・・。

「えっと、イマリアちゃんは何才なのでしょう？」

「えっとね・・・いっさい？」

と指を7本出している。

どっち！？　と思ってもまあ見た目から7才だろうと思う。

いや・・・1才は無いだろう。

「そっか1才なのですかあ。パパとママは？」

柄沙は何を思ってか1才で話し続ける。

間違いは訂正してあげてくれよ・・・。

イマリアはくいつと顔を上げ俺の方を見てから。

「パパ」

と単調に言っ て俺を指さす。

「・・・えつとお・・・」

ズサツと思い切り俺と距離を空けて亜鞘と柄沙が内緒話をしだす。

こういう時の男って気まずいよな。

男子禁制の空気っていうのか？

いやいや、断じてパパと呼ばせてる訳では無いけどドン引きされて
気まずいとか・・・そういう訳じゃないよ？

「亜鞘さんどうしましょう。刀弥様が変な性癖に目覚めつつある気が・・・」

「あたしもそれを察したわ。これは真つ当な道に引き戻すのは可能なのかしら？」

「やはり私たちがどうにかするしかないのをごさいますか？」

「そうよね、やっぱりそうなるわよね。だとするなら必要なのは大人の色香！」

勢いよく下を向く。ため息。

そして亜鞘は柄沙の肩に手を置く。

「あんたにこの役目はまかせるわ・・・」

「亜鞘さん・・・」

ガシィ！ と音が鳴りそうなくらいの力強い握手が行われるのが見えた。

「おゝい、話終わったか？」

まあ大体話の内容は読めるけどな。

どうせ俺が幼女愛好家とかどうか言われてたに違いない。

ふう、分かり切った答え程つまらない物はないよな。

「終わったにわ終わったけど。刀祢さ、何だったらあたしが『お兄ちゃん』って呼ばうか？」

「ははは、亜鞘。それは優しさとは言わないぞ？　後、俺が言わせ
てる訳でもないぞ？」

「では、刀祢お兄様。パパと言うのはどついう事なのでしょう？」

「ナチュラルに兄って呼ばないでくれるか？　後、その事は俺もま
だ分かって無いんだよ」

「分かっていないと言うのは？」

「いきなり教室に入ってきてパパと呼ばれて今に至る」

「何も分からないわね・・・」

全くだ。

何故俺がパパなのか、イマリアは何者なのかすら全く分からない状
況だ。

当然の事ながら俺の子ではないだろうし。

隠し子である訳でも隠し妻が居る訳でも無いし。

残る線は・・・夢？　ここまで来て盛大な夢オチ？

「・・・亜鞘」

「ん？　何？」

「俺を一発殴ってくれ」

「!?! ついに変な性癖に目覚めてしまった!?!」

「正氣に戻ってください刀祢お兄様あ!!」

ボグウ。と鈍い音が顔面から鳴る。

だから兄じゃ・・・な・・・い・・・。

次の起きた時には地面に横たわっていた。

俺って気絶してばっかな気がする・・・。

イマリアが「だいじょうぶ?」と顔を数センチくらいまで近づけながら心配してくれている。

夢じゃなかったかあ・・・。

俺は「大丈夫だよ」と頭を撫でてやると目を細め笑顔を見せる。

いやゝ、子供の笑顔って癒されるよね!

「と、刀祢様が安らかな笑顔に・・・」

「あれは気持ち悪いわね・・・」

イマリアの後ろでは亜鞆と柄沙がまた何か話し合っている。

まあ、結局根本的な部分は何も解決してない訳で。

さて、この先どうするか・・・。

第12話 『新しい日常』

とりあえずイマリアは紫陽花荘で預かる事になった。

基本的に先生不在のこの紫陽花荘ならイマリア一人が居たって特に問題ないはず。

食事だってほとんど自給自足だしイマリアの分が増えたって大した量じゃないだろう。

亜鞘が『警察に届けた方がいいんじゃない？』と割と現実的な事を言っていたがどうもイマリアは警察を嫌っているようで俺の後ろへ隠れてしまった。

さすがに無理矢理という訳にはいかず亜鞘もしぶしぶ預かる事に納得する形になったのだが……。

「こらこら、こぼしちゃメッ！ですよ？。ほらスプーンはこう持って……はい」

「う、うん。うん？」

とスプーンの握り方が分かってないのか手を試行錯誤しながら柄沙に教えられている。

どうも柄沙は母性本能が強いのか、紫陽花荘に着くやいなやイマリアに『お腹すいてない？』と聴き『うん！お腹すいたの』とイマリアが答えると、目を爛爛と輝かせキッチンに向かっていった。

数分後・・・。

目の前には俺と亜鞘も含めた4人では食べきる事が不可能だろうと思える程の数の料理が並んだ。

時間としては確かに晩御飯の時間とは言えなくはない6時きっかりだけど・・・。

そして食べ始めてからイマリアがスプーンをうまく持つ事が出来ずポロポロと食べ物をこぼしているので柄沙が握り方をキツチリ教えている・・・という状況だ。

まあイマリア本人曰く『ママ』は居るらしいんだけどな。

「・・・・・・・・」

柄沙がイマリアにスプーンの握り方を教えている所を黙々と料理を食べながら亜鞘が眺めている。

どうも亜鞘はイマリアをいぶかしんでるようだった。

確かに、俺だっていきなりパパとか言われてるから無関心では居れないし・・・。

それに、警察を嫌がった事も気になる。いや？今ぐらいの子供なら普通なのだろうか？

自分がこれくらいの時、俺は何考えてたっけか？。と記憶を掘り返してみる。

掘り返してみたが、記憶は“何一つ”でなかった。

考える事をやめ、目の前にある料理の数々を眺め溜め息を一つもらしながら近くにあったサラダをつついた。

イマリアの覚えがいいのか、柄沙の教え方がいいのかしつかりとスプーンを握り満面の笑みを浮かべながらピラフをさっきよりはこぼさずに食べていた。

ご飯を食べ終わった後、イマリアはすぐにウトウトし始めてしまった。

しかし、そこは母性本能を開花させてる柄沙で『食べてすぐは眠っちゃダメですよ』と声をかける。

「うにゅ・・・」

イマリアの返事はもう寝言にしか思えないものになっていた。

「今日は色々あったからな、主に俺がだけど・・・。疲れてるんだろ、寝かせてやろうぜ」

と言うと柄沙は『刀弥様がそう言うのであれば・・・』と自分の部屋のベッドで寝かせようと運ぼうとするが、何故かイマリアは少し

体をくねらせてそれを拒んだ。

「イマリア、パパと寝るの」

『・・・・・・・・・・』

何故か突然絶対零度のような視線を浴びせられて、冷や汗が更に凍ってしまふくらいの寒気を感じた。

毎回思っけど俺のせいじゃないよね？

「え・・・・・・・・と」

と俺が戸惑っているとイマリアはヨタヨタとおぼつかない足取りで俺の足元まで来て、ポスツと俺の座っている上に座る。

そのまま静止して、ものの10秒程で『スウー スウー』とおとなしい寝息をたててしまった。

なんとも寝つきのいい子である。

「ねえ、二人は本当にいいの？」

そう切り出したのは今まで黙っていた亜鞘だ。

「何がだ？」

「決まってるでしょ、その子をここで預かる事よ。名前と年齢はまあ分かったわ。でもそれ以外が全く分かってないのよ？。もしかしたら記憶障害とか何かの犯罪に関わってるって事もありえるわ」

「それはそうだけども、警察の所に行くのは嫌がつてる訳だし・・・。そんな無理やりどうこうっていうのは・・・。」

「それよ」

「えっ？」

喋りだした亜鞘の声が徐所に低い物になっていく。

真剣に、相手に訴えかける鋭い声に変わっていく。

「イマリアは何故警察を嫌がったの？。多分あんたもその事は引つかかったはずよ」

「そりや確かに気になったけど、このくらいの子供だったら警察を怖がったって別におかしくはないだろ」

「ええ、おかしく無いわよ。でもこのくらいの子供でも警察がどういふ組織かくらいは知ってるはずでしょ？」

「それは・・・。」

「そこまでにしましょう？。イマリアちゃんが起きてしまいます」
言葉に詰まった俺をフォローする様に柄沙が静止をかける。

「今は警察の話は後にしましょう。事情も何も知らずに警察に突き出すというのは正しいかもしれませんが私には道徳的に好きませんので」

そこまで言い終わると『はあ』と亜鞘が息を付く。

「それもそうね。まあ紫陽花荘なら子供一人くらい預かったって問題ある訳じゃないし。けど、もう一つ問題があるわよ?」

「まだ、あるのかよ・・・」

「当たり前でしょ?。刀弥、あんた明日学校どうするつもりよ?」

「学校?、そりゃ行くに決まってるだろ?」

「イマリアちゃんを置いて?」

「あつ・・・。」

亜鞘は『全く・・・』という顔をしながら再び息を付く。

そんな呆れなくても・・・。

「まあ、ここは私に任しなさい。なんとかしてみるわ」

とちよつと自信ありげに無い胸を叩く亜鞘だった。

「・・・で。刀弥?、アンタ本当にイマリアちゃんと一緒に寝るつもりなの?」

「ええ・・・、ああ・・・。」

俺は自分の膝の上に座って眠っているイマリアを見る。

飾り気のあまり無いワンピースが暖かいイマリアの体温を俺に伝える。

今、この子の父親は俺なんだよな……。俺は親なんて分からないけど……。居ないと寂しいよな。

「一緒に寝てあげるよ。起きて近くに俺が居ないと心配しそうだしな」

亜鞘と柄沙は『やっぱり……。』と小声でつぶやく。

「刀祢様はそういう方というのは分かっていましたからね」

「そうね、まあ今回は見逃してあげる事にするわ」

なんだか分からないが納得してもらえたようなので俺はイマリアを自分の部屋まで運んだ。

そつと自分のベッドの上に寝かせる。

「……。イマリア。お前は一体何なんだ？」

返事が返ってこない事を分かりながら無意味に独りごとを漏らした。

次の日の早朝。

いつも通りの毎日とは行かず、朝起きたらいつの間にか俺の腕を枕

代わりにして眠っているイマリアが居た。

「・・・・・・・・・・」

おかしいなあ、確かに一緒にベッドで寝たけどちゃんと離れてたんだがなあ・・・・・・・・。

しかし、まだ寝てるのか。いや、もしかしたら一度起きて寄ってきたのかもしれない。

っていつか腕が痺れて動かないです。はい。

すると、トットットと軽快な足音を立てながら階段を上ってくる音がする。

ああ・・・・・・・・。これはマズい。何がマズいつて？そりゃあ・・・・・・・・。

俺は首だけを動かし今だ焼き焦げた穴の空いているドアを見つめる。顔をそつとのぞかせたのはいつもの様に亜鞘・・・・・・・・ではなく柄沙だった。

「と・・・・・・・・刀祢様・・・・・・・・。私、信じてましたのに！！」

俺とイマリアを見た瞬間膝から崩れ落ちてしまった。

「い、いや！柄沙聴いてくれ！これはイマリアが勝手に・・・・・・・・」

「うにゅ・・・・・・・・。パパあ、おはようございますの」

「あつ、おはようイマリア」

「ん」。パパの太くて硬いの」

とちよつと不機嫌そうに俺の腕をペチペチと叩く。俺の腕枕はそんなに寝苦しいですか。

「ふ!!太くて・・・か、かかか、かた・・・」

柄沙は何故か唐突に顔を真っ赤に染め上げ、トマト顔負けの色までいったかと思うと急に横向きに倒れて動かなくなってしまった。

こんな感じの変な誤解を避けたかったんだがなあ・・・。

まあ相手が柄沙だけマシか、亜鞘だったら燃やされかねない・・・。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「降りようか？」

「うん!」

朝からイマリアの返事は一人前だった。

下に降りるといつも聞こえてくるはずの包丁を使う音や卵を焼く音が全く聞こえなかった。

まあ上で柄沙がのびてしまったので料理する人が居なくなったのが原因だろう。

しかし、亜鞘はどうしたのだろうか？と思ってすぐに足音がしたと思ったら亜鞘がリビングに入ってきた。

「おはよう刀祢、イマリアちゃん」

「おはようございますの！」

「おはよう亜鞘。・・・すごい隈だぞ？」

入ってきた亜鞘の顔にはパンダさながらの真っ黒な隈が浮き上がっていた。

「き、気にしないで！これはイマリアちゃんが気になって、あんたの部屋を行き来してただけなんだから！」

「・・・・・・・・・・」

なんだろう？朝から二人の様子がおかしすぎるぞ？。

柄沙はいきなり倒れるし、亜鞘はなんが誤爆ってるし・・・。（しかも誤爆に気付いてない）

っていうか亜鞘は何してんだよ。

俺は『はあ』とちよつと大きめの溜め息を漏らしながら仕方なくキッチンに向かい簡単な料理を作る事にした。

別に俺や柄沙や亜鞘なら朝飯を抜いたくらいはたいした事ないかもしれないが、さすがに今はイマリアが居るからな。

ちゃんと栄養バランスも考えるか。

しかしもって、俺にそんな料理センスは無く。作ったものはハムエッグにレタス、んでちょっとマーガリンを塗ったトースト。

まあ、男の俺に出来るのってそんなもんだよなあ……。

出来あがった料理をお皿に盛りつけるとイマリアがキッチンに入ってきて、ちよつと大きめのお皿を両手でしっかり支えながら机まで運んでくれた。

この子は絶対将来良い嫁になるな。とひそかに思った。

第12話 『新しい日常』（後書き）

しばらくの間、受験やら何やらで忙しく全然書いて（打って？）ませんでした。

見てくださっている読者様。

どうぞよろしければまたご愛読お願いします。

今回はちょっと長めにしてみました。

第13話 『変わる兆候』

「おいおい、お前ら大丈夫かよ？」

イマリアと一緒に朝食を取ったあと学校へと向かっていたのだけ
れど……。

『私に任せなさい』と言った亜鞘が先生に頼んでイマリアを保健室
で預かってもらえないか掛け合うらしいのだが、今亜鞘は目に盛大
な隈を付けフラフラな足取りで登校している。

亜鞘のらしくない姿に少し不安になる。

「大丈夫に決まってるじゃない！ちょっと眠たくて、ちょっと気分
悪くて、ちょっと頭が痛いだけなんだから！」

盛大に不安になった。

「本当か？具合悪いんなら素直に休んどいた方がいいんじゃないの
か？」

「大丈夫だつてば！ほら、あんただつて顔歪んでるわよ！」

と俺の顔の前で手をブンブンと振り回す。

どうやら視界までばやけ始めたようだ。

これはイマリアを預けると同時に亜鞘も預けなきゃいけないなあ……。

「・・・・・・・・・・」

「えっと・・・・・・・・柄沙？お前も大丈夫か？」

「・・・・・・・・・・」

柄沙は朝、何を誤解したのか赤面したのちに失神し意識を取り戻したかと思うとずっと『ポヘー』としたままでへんじがない。

ただのしかばねの（ry

まあ普段から柄沙はボーっとしてるけど、返事が無いのはちょっと心配になる。

イマリアは俺と手をつないで登校してる訳だが、どうも視線がイタイ。っていうかすべてがイタイ。

『ねえ、昨日のアレじゃない？』『そうアレ！アイツ絶対口○コンだよ』『だよねえ、アイツ絶対危ない奴だよ』と女子の陰口（聞こえてるけど）。

『ちつくしよお！なんでアイツはつか可愛い子が！』『マジ許すまじ！』『ついには幼女だど！？しかも手をつないで登校とかなめてんのか？』と男子の殺意の籠ったシャウト（主に変態）。

さてはてさて、俺は学校で無事平穩に過ごせるのか！？。

はい、無理です！。すでに平穩じゃないです！。

元々嫌われ者だったけどこれで嫌われ度はMAXを超えるんじゃないだろうか？。

そして、所々で缶を投げようとする生徒がいるんだけど・・・。

『ちょ、お前らなんだよ！』『幼女に向けて缶を投げようとするなと言語道断！』『制裁！断罪！天誅！鉄槌！』『なっ、おい、やめる！。おい、や・・・やめてくれえー！！！！』

「・・・・・・・・」

僕は何も見なかった。

「パパどうしたの？おなかいたいの？」

とイマリアが心配そうにこっちを見ている。

どうやら俺は相当青い顔をしていたらしい。

とりあえず心配させまいと『大丈夫』と一言。頭を撫でてやるとそれをくすぐったそうに目を細めた。

なかなか前途多難な登校を終えて学校へとたどり着いた。

しかし、安息地を得るにはもう少し時間がかかりそうだ・・・。

とりあえず亜鞘に保健室で預かってもらえないか相談してもらった。返事はやつれた笑顔で親指グッドマーク。

イマリアを学校の居る時間までは預かってもらえる事になった。

「パパいつちゃうの？」

イマリアの寂しそうな顔が俺の心に罪悪感を与える。だけどどうしろと・・・。

「まあ行くんだけど。そんな寂しそうな顔するなって、休み時間になつたらちゃんと会いに行くし、あそこのおばさ・・・ゴフツゴフツ！お姉さんが遊んでくれるから」

「・・・うん」

と今までの返事とは違う躊躇いのある返事だった。

その数分後、亜鞘も保健室のお世話になりましたとさ。まる。

教室に着いても変わらず突き刺さる視線、私怨、怨念。

イマリアが居なくなつてさらに増したかもしれないな。

だけど朝の一件なのか俺に対してイジメ的な事を行う奴はいないようだ。良かった良かった。

その日は休み時間になる度に保健室へ向かいイマリアと亜鞘を見に行くことになった。

柄沙？柄沙は・・・。

「・・・・・・・・」

現在進行形で放心状態だ。

クラスでは『柄沙さん大丈夫？』などと心配されていたけどな。

返事は『あつ・・・うん』と曖昧なものだったが。

柄沙は成績が悪いだけで友達つきあいは悪くないからな。

ただ・・・評価を見て柄沙の事をぞんざいに扱う先生も少くない。

それを見て俺がやらかしたのが原因で生徒からは怖がられ先生からは嫌われているんだがな。

結局放課後までそんな事が続いて、保健室でイマリアを迎えに行った。

しかし、今は下校中の生徒が多くて、この中を再びイマリアと手をつないで帰る気にはなれなかった。

「刀弥様。私は先に帰らせていただきますね、晩ご飯のご用意などもございますし」

「そうだな、んじゃよろしく頼む」

「はい、かしこまりました」

とやっと正常に戻った柄沙が少し上機嫌にグタツとしている亜鞘を連れて紫陽花荘に帰っていった。

まあ、亜鞘は養護教諭の方に『よく寝るように』と説教されていたので、それで疲れているんだろう。

先生は職員会議があるからと言うことで部屋をあとにした。

結果、保健室には現在俺とイマリアだけなのである。

「イマリア、今日はどうだった？」

とりあえず当たり障りのない会話で無言の空間だけは避けようとする。

「えっとね、あのお姉さんと一緒にお人形遊びしたの！」

「楽しかったか？」

「うん！」

イマリアは一人前の返事を満面の笑みで返し、どれくらい楽しかったのかを両手を大きく広げて表現していた。

ふいに保健室のドアが開いた。

先生が会議を終えて戻って来たのかと思った。

だが、違った。

入ってきたのは真っ白の純白の髪を揺らしながら右手に漆黒に染まった物質紙を構えた、ここの制服を着た女の子だった。

マテリアルカード

「ママ？」

「え？」

ママと呼ばれた女の子は顔を伏せたまま、ただ魔法を唱えた。

「ジャックドールベイン
“鴉の羽根”」

カードは形を変え一本のナイフになった。

「・・・・・・・・」

女の子は少し震えたかと思うと、イマリアを見つめナイフを投げた。

「！！・・・危ない！！」

真っ黒なナイフはそれこそ直線を描くように飛んだ。

俺はイマリアと一緒に倒れこむようにナイフを避ける。

「てめえ！、何しやが・・・」

文句を言おうと女の子の方に振り向いて見えたのは。

指と指の間、全てにナイフを挟んですぐ動きだせるように姿勢を低く保った、戦闘態勢を取った姿だった。

こいつ、本気で殺る気だ!!。

「イマリア！逃げるぞ！」

俺はポケットから物質紙を取り出し、『アウオイダンサー回避者』と唱え、イマリアを抱えて逃げ出した。

保健室のもう片方のドアから飛び出そうとする。

だが、俺の足元に動いたら刺すと言わんばかりにナイフを突き立てる。

女の子は顔上げずに尋ねた。

「貴様は何故、ソレを守ろうとしている？。ソレはお前らにとっては敵だろう？」

と女の子がイマリアを指差す。

イマリアが敵？こいつは何を言ってるんだ？。

「・・・なんだ知らないのか。フン、なら言う必要は無いな。ソレはここで殺す」

飛んでくる無数のナイフは回避者による強化で止まって、エンチャントまでは言えないがかなり遅く見える。

ただど数がおかしい。初めに見えていたのは一本のナイフだけだったはずだ。

なら考えるに相手の魔法はナイフを作り出す魔法。

投げられるナイフはことごとくかわしているが、いつまで回避者が持つか……。

俺の魔法核はそんなに容量ねえぞ……。

相手はただ黙々と俺の急所となる様な所か、機動力となる足を重点的に狙ってくる。

こんなもん足なんか喰らったら次の時にはハリセンボンにされちゃう。

「パ……パパあ」

俺の腕に抱かれたイマリアがカタカタと震えながら泣いていた。

なあ、泣かないでくれよ。

俺は誰の涙も見たくないんだ。

亜鞘と柄沙の涙だつて見たくないんだ。

これ以上、俺にそんな悲しい涙見せないでくれよ。

俺は静かに流れるイマリアの涙を眺めた。

そして、ナイフを投げ続ける相手を見る。

お前は何だ、何故イマリアを殺そうとする。

一体イマリアは何なんだ。

俺の心の声は表にでる事無く、ひたすらにナイフをかわし続ける様子を少し苛立たし気に見ている女の子の手には、今までのナイフとは明らかに違うサイズの小さいナイフがギッシリと持たれていた。

「これなら全ては避けれまい」

彼女の手から放たれたナイフはほとんど隙間なく俺の足を狙っていた。

俺は足に怪我を負うまいと上へ飛ぶ。

「・・・単純な奴め」

底冷えする様な声が届く。

その瞬間自分が失敗したのを自覚する。彼女の手には新たに作り出したであろう四本のナイフ。

それを先ほどと変わらぬモーションで投げる。

ナイフは何処へもそれる事なく全てイマリアへと向かって飛んでいた。

「クッ・・・!!」

俺は体を限界まで捻って、白いシーツの乱れてない保健室のベッドにイマリアを放り投げた。

「キャッ！！」

いきなり放り投げられたイマリアは小さな悲鳴を上げる。

ナイフは俺がついさっきまでイマリアを抱いていた所。

すなわち俺の心臓部近くに四つ突き刺さった。

突き刺さったナイフは数秒したのちに空気に消え、俺の体に穴を開けた。

その穴からは滞りなく、赤く、紅く、朱く、鮮やかな血を湧き水のように滴らせた。

「パパあ！パパあ！！」

何故だろう？。割と近くだと思っていたイマリアの声が遠く聞こえる。

あああ、あんなにも涙をボロボロこぼしやがって・・・。

いや、こぼさせやがって！！

俺はあらん限りの力で起き上る。いや、起き上ろうとする。

しかし、手には力が入らずガクガク震えるだけだった。

「・・・無駄な事を・・・。お前がアレを庇わなければ、お前は死ななかったものを」

「コヒュー、ヒュー」

声を出そうにも肺に穴が空いている様でただ空気が抜けるだけだった。

俺は彼女をただ睨む事しかできなかった。だからこそ睨み続けた。

「・・・ッ！。まだそんな目をするのか！」

女の子は再び手に一本のナイフを構える。

「・・・死期が少し短くなるだけだ。今すぐに楽にしてやる」

走馬灯は一切出なかった。

ただ俺の視界を白い何かがふさいだ。

「ダメッ！！パパをイジメちゃダメッ！！」

目の前には銀色の艶やかな髪。それだけで誰かがすぐ分かる。

だから俺は必至に叫ぶ。

逃げる！！

俺の願いは声にもならず、手を動かす事も叶わず、ただ暗く意識を無くすだけだった。

第13話 『変わる兆候』（後書き）

感想やレビューなど書いてくれると嬉しいです。

あと誤字、脱字などがあればご指摘お願いします。

第14話 『真実の存在』（前書き）

これはイマリア視点で書かれています
色々と混雑してますが何卒ご容赦を。

第14話 『真実の存在』

「パパあ！パパあ！！」

イマリアは必至に叫ぶけれど刀祢は一切の返事もしない。

いや、出来ない程に致命傷を負ってしまっていた。

心臓部近くに四本のナイフが刺さったかと思うとナイフは煙のように消えて、ぽっかり空いた穴から蛇口をひねった時の様に、だけど流れ出るのは水ではなく鮮血。

刀祢はそれでもイマリアを守ろうと立ち上がろうとする。しかし、血が流れ出すぎたのか深い傷なのかガクガク震えるだけで体は上がらなかった。

「・・・無駄な事を・・・ お前がアレを庇わなければ、お前は死ななかったものを」

刀祢へ致命傷を負わせた女の人は少し呆れる様な口調で吐き捨てる。

パパはパパはイマリアを守ろうとして、死んじやう、死んじやう。

ヤダッ！ヤダッ！ヤダヤダヤダヤダッ！！

パパは悪く無いの！パパは何もしてないの！だからパパは、パパは・・・。

「・・・・・・・・ッ！まだそんな目をするのか！」

急に女の人は狼狽する。よく見ると刀祢が首を横に向け、息を荒げながらただただ睨んでいた。

「・・・死期が少し短くなるだけだ。今すぐ楽にしてやる」

女の人はそれを不快に感じたのか苛立った声。そして同時に憐れむような声だった。

新たにナイフを手に作り構える。

昨日初めて会ったパパだけど、パパは最初から疑う事なく受け入れて、イマリアのために一生懸命になって、一緒に遊んでくれて、甘えさせてくれて、朝ごはんも作ってくれて・・・。

何も悪い事してないの。パパは何も悪い事してないの！！

だから・・・。

「ダメッ！！パパをイジメちゃダメっ！！」

体が勝手に動いた。としか言いようが無い程、いつの間にかイマリアは刀祢と女の人の間に立っていた。

後ろでは「コヒュー、ヒュー」と息を切らす音しか聞こえない。

目の前の女の人は何か複雑な面持ちでイマリアをまっすぐに見る。

後ろから感じる刀祢の視線がいつの間にか消え、女の人がついさっきまで放っていた凄まじい程の殺気も消えていた。

「お前は自分が今、何をしているのか分かっているのか？」

「……………」

イマリアは女の人は何を言っているのかよく分からなかった。

しかし、背中についさっきまであった視線は消えたのに背中が焼けるように熱かった。

そしていつの間にか女の人の持っているナイフが見えるだけで声が出なくなってしまうていた。

「……やはり、分かっているのだな。後ろを向いてみる」

言われてそつと後ろを振り向いてみる。

見えるのは刀裃の姿。だけではなかった。

イマリアの背中には少し青みがかった灰色の翼がついていた。

「何……………これ……………」

「理解したか？。お前は人間ではない」

「……！」

人間じゃない？じゃあ一体…………。

「お前は“イ・マテリアル無形”と呼ばれる……………化け物だよ」

「ばけ・・・もの・・・」

頭の中はぐちゃぐちゃだった。全てが抜け落ちるように何も考えられない。

今、自分に生えている翼の陰に見えている、すでに呼吸していない刀祢の姿。

「イマリアはパパの・・・パパの子供じゃないの？」

「その者の子供どころか・・・お前は造られた、ただの物だ」

無形、パパの子供じゃない、化け物。

「イヤ、イヤッ！！イヤーーーー！！！！！！」

急激に押し寄せる負の感情。悲しみ、恐れ、絶望。

その全てが心の中で渦巻く。ついさっきまでの平和な時間は今こころで、音を立てて壊れた。

第14話 『真実の存在』（後書き）

主人公側の話ではないので短い目になってしまいました。

読み応えに欠けるかもしれませんが、感想など頂けると嬉しいです。

第15話 『感受出来ない事』

俺の意識は突然現実に戻された。

耳を劈くような悲鳴によって。

「イヤ、イヤッ!! イヤーーーー!!!!」

気付けば俺の目の前には飾り気の無いワンピースに艶やかな銀色の髪。

それがイマリアだと言う事に気づく。そして、

イマリアの背中から生えている翼に絶句した。

「・・・・・・・・」

口が塞がらなくなるというのはこういう事を言っただろうな。と自分の心の中で現実を受け止めきれない部分が俺を壊れないように保とうとする。

だが、俺の心はすでに目の前の現実を見てしまった。

イマリアの背中から生えている翼は青みがかった灰色で、まるで雨雲ようだった。

「うう・・・グスッ、うああ・・・」

イマリアは俺が気を失う前よりも酷い泣き顔だ。

顔グチャグチャにして涙も鼻水も流して、手で必至にぬぐおうとグシグシやってるけどぬぐえる訳が無いと簡単に分かるくらいで・・・。

「イ・・・マ、ゲホッ!」

名前を呼ぼうもその声は喉まで込み上げてきた血によって止められた。

それでもイマリアは俺の声が聞こえたのか体をビクッと震わせ目を擦りゆっくり顔を向ける。

「パバア・・・うくつ・・・イ・・・イマリアね・・・」

イマリアは何かを堪えながら少しずつ言葉を紡いでいく。

奥にいる女の子は『待ってやる』と言わんばかりに腕を組んでいた。

「イマリアね・・・パパの子じゃないの・・・」

正直、これに関しては元から違うと思っていた。

でも俺の子供だと信じていたイマリアに取っては大きな事だったのだろう。

俺に、覚悟して言う程なのだから。

「あとね・・・イマリアね、人じゃないの・・・」

息を整えつつあるイマリアの言葉が鮮明になる。

鮮明になる言葉が俺を混沌を落としていく。

「イマリアね・・・化け物らしいの・・・」

「ば・・・け・・・」

「だから・・・ゴメンなさいなの・・・本当にゴメンなさいなの・・・」

イマリアは後ろにあつた窓ガラスを勢いよく開けで外に飛び出る。

「ま、て・・・待て!!」

イマリアは一度だけ振り向いたがすぐに前を向いて飛びさる。

いきなりの行動で女の子もうまく対応できずナイフを投げるも、ナイフは窓の外へ出てただ空を切っただけだった。

バサッ！バサッ！と大きな羽音を鳴らしているのが分かるが、その音は徐所に・・・本当に徐々に徐所に遠ざかっていった。

女の子は自分を悔やんでいるのか憎たらしげに俺を睨んで盛大に舌打ちをする。

「お前のせいで逃がしてしまったではないか・・・しかし、これで分かっただろう。アレはお前らが敵としている物。『無形』だ」

イ・マテリアル

女の子は説明し終えた後、速足で保健室を出ようとする。きつとま

たイマリアを追う気だ。

「待て！！待てよ！！」

イマリアは止まってくれなかったが女の子は鬱陶しい事を理解しているはずなのに足を止める。

きつとそれは俺が一般人だからだろう。

そして、彼女は何らかの秘密があるのだろう。

だけど、俺は関わってしまったから。義理にでも答えてくれているのだと思う。

俺がイマリアを諦めるようにと。

「お前の名前は？」

「あまがい雨谷 ゆぎ 靱。それが今の私の名だ」

「い、ゲホツ！！・・・はあ、今の？」

「ああ、私は学校に潜入しているだけだからな。しかし、任務は失敗に終わった。私を探そうともこの学校から居なくなっている事だろう」

彼女・・・靱はナイフを俺の倒れている手前につき立てる。

「まだ、あの無形に関わろうと言うなら。次は必ず殺す」

刀祢は血だまりの中、それ以上言葉が出ず、ただただ鞆が去っていくのを見ているしかなかった。

ズキィ！！

鞆に向けられていた意識は再び傷へと戻ってくる。

とりあえず、止血しないとな……。ここが保健室でマジ助かった……。

と……。ズリズリと這いながら救急箱へと向かい壁を支えに立ちあがった。

流れ出る血で服はいつもの倍くらい重くなった気さえする。

服を脱ぎ捨て包帯を巻くがうまく巻けなかった。

歪ながらも巻いた包帯を見て無償に自分が情けなくなる。

俺は何もできなかった。イマリアを守る事も涙を止める事も……。

そして、現実を受け止める事も。

俺は今だに全てが信じられない。

イマリアとは血縁が無い。それは元より分かり切っていた。

だけど、イマリアが化け物だなんて……。全く思えなかった。

「だってよ……。笑うんだぞ？温かいんだぞ？泣くんだぞ？」

俺はいつの間にか呟いていた。

「そんなの・・・・・・・・」

信じられる訳がねえ。

悲惨とも言える今日を境に俺は病院にて過ごす事になった。

あの後、先生が戻ってきて即病院送り。

傷はすぐに縫合して、ベッドに横にされた。

「はあ・・・・・・・・」

行き場の無い溜め息が、病院の個室で漏れる。

正直少し疲れた。その次の日、すぐに警察が来て事情聴取。

何があったのか、誰にやられたのか、場所、性別、服装、体型、動機
の心あたりなど・・・・。

しっかりと警察の職務をこなしているのだろうが、俺は一般的な善良な市民では無いようだ。

性別に対しても『分かりません』。

体型に対しても『分かりません』。

動機の心あたりに対しても『分かりません』。

何故かあいつの・・・鞆の事を話せずにいた。

イマリアの事も何もかも・・・。

見上げる天井はとくかに真つ白で、清潔感より無機質感がにじみ出てるようだった。

開けた窓から吹き込む風により揺れ動くのはカーテンのみ。

俺はその窓から外を眺めてるしかなかった。

外を眺めているのはきつと、落ち着かないとかやる事が無いとかが理由じゃない。

もしかしたら・・・。本当にもしかしたら・・・。イマリアが見えるんじゃないかって思ったから。

だけど、窓から見えるのはただの青い空で・・・。飛んでいるのはただの鳥で・・・。

「はあ・・・。」

やっぱり溜め息しか出なかった。

「入るわよ」

「失礼します」

まだ朝とも昼ともつかない11時。

病室に亜鞘と柄沙が入ってきた。

亜鞘の手にはお見舞いによく見る果物の詰め合わせで、柄沙の手には花だった。

「お前ら、学校はどうしたんだよ？」

すると亜鞘は自信満々に断言した。

「サボった!!」

正反対に柄沙は言い訳ぐるしく。

「えっと・・・無条件進級が決まっていますので・・・あの、少々抜けたとしても大丈夫かと思われますので・・・亜鞘さんの誘いに・・・」

と長々と喋っている。

全く・・・心配してくれるのは嬉しいんだけど・・・。

むしろお前らのこれから先の方が心配になるつつの。

「はい、これ。お見舞い」

「ん、ありがとうな」

とバスケットを机の上に置かれ、花は病室にあった花瓶に活けられた。

「さて・・・と、言いなさい。昨日何があったの？イマリアちゃん
は？」

「やつぱり・・・そうだよなあ・・・」

散々『警察へ』とか『何で』とか言ってたのになあ。

このテンプレートツンデレめ。俺への心配がぞんざいすぎるだろう。

ものの30秒でイマリアの話題に移ったぞ。つうか『大丈夫？』と
か『元気？』とか言う言葉すら聞いてないのに・・・。

仮にも手術したんだけどなあ・・・。つか結構重傷だったよなあ・・・。

だけど、そういう文句や悪態も付けられないよな。

だってさ、亜鞘の目がいつになく真剣でさ。それだけイマリアの事を心配してくれてるんだもんな。

「な・・・何よ!」

「いや、何でもない」

これから嫌な事を話すんだ。

少しくらい、この気分を味わったって良いだろう？

『ふう』と一息ついてから俺は頭の中で昨日出来ごとを反芻させる。
悔やんでも悔やみきれない出来ごとを……。

「んじゃ、聞いてくれるか？」

「もちろん！」

「はい！」

俺は昨日の出来事を全て。明細には答えれてないかもしれないけど話した。

イマリアが化け物……無形であるかもしれない事も……。

「それは……本当なのですか？」

「……多分」

「でも……背中に翼なんて……ありえないじゃない……」

当然だが亜鞘も柄沙も信じれるはずがなかった。

俺だってついさっきまで全然整理がついてなかったからな……。

案外話してみるもんだよな、頭の中で整理されてちよつとずつだけど落ち着いた。

まあ変わりに二人は混乱しちゃってるけど……。

「そして、その鞆……だっけ？。そんな先輩あたしは知らないけど……柄沙は何か知ってる？」

「いえ……交友はそれなりに多いですが学年が違いますと……」

「だよな。それにあいつ、もう学校には居ないだろうって言ったし」

『はあ』三人の溜め息が重なってしまう。

「とりあえず刀弥は早く怪我を治しなさい。それまでは私達が出る事をやるから」

「出来る事？」

なんというか……早速だけど柄沙が冷や汗を流している。

このパターンって……もしかして……。

「まず、学校の実践授業を受けて、イマリアちゃんに関係ありそうな物が無いか調べる」

『うんうん』

「次は本当に鞆っていう生徒が居たのかを調べる」

『うんうん』

「もし居なかったら、依頼で関係ありそうな物を受ける」

『うんうん』

「もし居たら、消し炭にする」

『うん！？』

あるれえ？途中まで平和的でそれなりにまともだったのになぁ・・・。

ラスト消し炭だよ、消し炭。

まあ、らしいっちゃらしいけどさ。

「プッ」

「やっと笑ってくださいましたね」

柄沙は顔を優しげにそして、柔らかに微笑む。

「刀弥様、私達はちゃんと分かっていますので。私達は大丈夫ですので」

柄沙の目は相手を思いやる優しい瞳だった。

そっだよな。こいつらの芯は俺なんかよりよっぽどしっかりしてて、よっぽど強くて……。

だからこそ、自分の無力に腹が立って。

自分と同じように思っていた柄沙は、実は紫陽花荘を支える立派な柱で。

「全く、心配かけんじゃないわよ!」

と闘魂注入と言わんばかりのフルスイングビンタを浴びせようとする。

どう考えても病人に対してする事ではない。

まあ、今回はしっかりカードを携帯してたから問題ないけどな。

アヴオイダンサー
「回避者」

そう唱えると亜鞘のビンタがゆっくり見え……ベチンッ!!

『えっ?』

亜鞘と柄沙の声が重なる。

「クウ……。亜鞘、もうちょい加減しろよ!」

「うっ……ごめん……」

「いつてえ……。あれ？でも何で俺……」

なんでビンタ喰らったんだ？回避者が発動しなかった？

俺は手に持ったカードを見る。

俺の元々のカードの色は緑色だった。

そのカードは今、緑色は緑色でも黄緑色になっていた。

第15話 『感受出来ない事』（後書き）

タイトルは時折話すとズレてる気がしないでもない・・・。

まあ気にしたら今更って感じなので諦めて（え

感想よろしくお願いします。みなさんの意見を聞いてみたいです。

第16話 『初めて感じた事』（前書き）

これは柄沙視点からの話になります

第16話 『初めて感じた事』

柄沙 SIDE

「一体どうなされたのでしょうか・・・」

「さあ？あいつなりに変わってしまったような事だった。それだけよ」と、そっけなく返す亜鞘はずっと刀弥様を叩いた右手を見ていた。

本心の所はもっと思う事があるだろう、そう思えるのはきつと亜鞘の顔がちよつと怒っているような悔やんでいるような・・・。

ふいに自分の眉間を触ってみる。そこにはちよつと皺がよっていた。なんででしょう？私は別段怒っている訳でも悔やんでいる訳でも無いのですが・・・。

じゃあ、眉間に寄った皺は何を表わすのでしょうか？

無言のまま歩き続ける中、考えてみて思いついた言葉。

嫉妬？。これが嫉妬？。

今までだって亜鞘さんや他の方を羨ましいと思った事はある。

ただ、その羨ましいと思った感情に負はあったとしても妬ましいとまで思った事は無いと思う。

けれど今、私はきつと嫉妬している。

他に考え付く言葉が無い。だからきつと嫉妬している。

そして、亜鞘さんも嫉妬しているのでしょう。

だからそんな表情をされているのでしょう。

でも、何故？どうして？。決まってます。

きつと私と亜鞘さんは同じで、イマリアちゃんが羨ましいから。

刀弥様は誰にだって優しい。私にだって、亜鞘さんにだって、イマリアちゃんにだって平等に優しくかった。

だけど私と亜鞘さんはイマリアちゃんが羨ましかった。

たった1日……。本当にたった1日。

それだけで刀弥様の心を動かしたから。

「・・・・・・・・・・はあ」

「？。どうしたのよ？柄沙が溜め息なんて・・・別に珍しく無いけど」

「誰かさんのおかげで増える一方ですので」

「それ、どういう意味よ！あたしのせいって言いたい訳？」

「いえいえ？誰も亜鞘さんとは言っておりませんので」

「じゃあ他に誰って言うのよー！」

「どなただつてよろしいではありませんか。その様にムキになつていますと皺が出来ますよ？」

「なにおおー！それなら柄沙だつて眉間に皺よつてんじゃない！ど
うせ！・・・どうせ・・・」

勢いよく叫んだと思つたら急激にしおらしくなる。

眉間に皺がある理由が、自分が少しイラだつている理由が、ただの嫉妬だなんて・・・と。

「ああ・・・。もう！今日はもう帰る！。それで良いわね？」

「別に構いませんが、亜鞘さん」

「何？」

「亜鞘さんは、無形であるイマリアちゃんを真剣に探す事ができま
すか？」

「・・・・・・・・・・」

亜鞘さんは黙つたままきつくこちらを睨む。

私を睨む理由は簡単だ。

それは亜鞘さんがこの学校に入った理由。それは亜鞘さんを最強たらしめる理由。

それは決して曲げる事の出来ない理由。

「・・・話した覚えは無いんだけど・・・いつから知ってたの？。あたしの・・・あたしの両親が無形に殺された事」

「魔法学校に入ってからですよ。噂と思っていましたが・・・いえ、思いたかったのですが・・・やはり本当なのですね」

「・・・・・・・・ええ」

「では、どうなのですか？」

「決まってるじゃない。あたしが手を抜くなんて・・・ありえない！！。それに・・・」

「それに？」

「あたしが殺したい無形はイマリアちゃんじゃない・・・。いや、ゴメン、やっぱり無形は全部憎い。全ての無形を焼却しても収まらないかもしれないくらい憎い」

「亜鞘さん・・・」

「でも、大丈夫だから。『出来る事をやる』って言うっちゃったしね」
少し、恥ずかしげに言う亜鞘さんは刀弥様に見せたくないと思う程に可愛かった。

（はぁ・・・刀弥様。私のライバルは相当難敵の様です）

「ん？、浮かない顔してるけど・・・。まだ何かあるの？」

「いえ、ありませんよ。ただ聞いてくれませんか？」

「何を？」

「私の過去。私が私であり、月下家つきしもに捨てられた過去を」

これは同情を買うためではない。

自分自身を、亜鞘さんと並ばせるため。

平等に、そして公平に。

私は私を語ろうとしている。

「でも、いいの？。今更の事って事もあるんだけど、今まで言わなかったっていうのは言いたく無かったって事なんですよ？」

「そうですね構いません。私だけが亜鞘さんの過去を知っているなんて・・・不平等ではありませんか」

「それでもあたしは無理に言ってもらいたくない」

「無理などしておりません」

真剣な返しを真剣に返す。これが誠意である事は亜鞘さんにも容易

に想像がついたのだろう。

しばらく目を閉じて考え、聞く決意をしたのであろう綺麗な瞳をこちらに向ける。

「では・・・お話します」

こうして、私は自分で自分過去を晒した。

私の生まれは先ほと言った通り。月下家。

そこは世々代々武家屋敷であり、そこに生まれおちた子は女性であろうと武士へと育てられる。

しかし、時代が進むごとに武士の必要性は無くなり月下家は衰退の一途を辿っていた。

それ自体はそれほど珍しい事ではなく、よほど有名な武家で無い限りは流派や武術の継承が行なわれなくなった。

しかし、先祖代々武士の家系であるという枷が月下家を絡め捕る形となった。

伝統的に剣術が教えられる事はすでに月下家では決定事項とも言え

た。

これ自体に問題は何一つ無い。

問題は生まれ落ちた子にあった。

“せんいきんつうしょう
線維筋痛症”

中高年に発生する事が多い病気で、激しい痛みが全身を襲う、原因不明の病気。

治療法の確立されてないそれを柄沙は自我が目覚めてすぐ、4歳の時に発病した。

全身の痛み故に柄沙は一日中泣いては泣きつかれ一日中眠るという毎日を過ごした。

五感すべてが過敏になり触れる物全てから痛みを受けた。

立つこともままならず、声を上げるのですら痛い。

死ぬほど痛い。本当に痛い。でも・・・死にたくない。

まだ死にたくない。生きたい。立って歩きたい。もっと喋りたい。

自宅療養により広い屋敷の一室で真っ白な布団の上に横たわりながら、痛みに悶え涙を枯らしながら思う事はそれだけだった。

両親からしたら酷く残念な事だっただろう。

我が子がこのような病に侵されている事、自分達の代で剣術を途絶えさせてしまう事。

この二つは両親だけでなく祖父も落胆していた。

養子を取るなどの案が出たが、元より絶え絶えである武家に今更とというのがお父様の意見だった。

その事に祖父は激怒したが、お母様に宥められ養子は取らず私の回復を祈るという形で収まった。

結局、私が完治したのはそれから5年後の事だった。

完治する1年前に祖父は天寿を全うし、月下家は完全に剣術の伝承を途絶えさせた。

私はと言うと9歳になったというのに体は虚弱で頭も弱いままだった。

同じくらいの年の子はすでに分数を習っていた。

私は足し算から入る事となっている。

学校に行つては『バカ』や『アホ』などの単純な悪口が当てられる。

1年と行かずしてすでに学校が嫌になってしまった。

だけど、学校に行くのを止めなかった。

それは、毎日放課後に残って勉強している時。

外で遊んでいた男の子達が散り散りに帰って行く中、ただ一人グラウンドでボールを蹴っている男の子がいるから。

その男の子は私と同じクラスの子なのだけけれど。

別段友達になれそうとか、同情してくれそうなどと考えていた訳では無い。

ただ時折、その男の子の目が深く、暗く沈む時があった。

その目が私にはとても寂しそうに見えた。

そんなある日の放課後。

いつも通りに勉強をしている時、ふと窓の外を見る。

外は一人たたずむ男の子の姿すらなく誰も居ない、私だけが存在している様な錯覚をするほどに無人だった。

（今日は何か用事があったのかな？）

そう思った時、教室の扉が開く。

「あつ」

入ってきたのは、いつも一人の男の子だった。

「・・・何してんの？」

ちよつとぶつきらばうな言い方だけど、無視が出来ない性質なのか
シブシブと言ったように聞いてくる。

「お勉強」

「そつか・・・お前バカだもんな」

「うん、だからお勉強してる」

「・・・ちよつと見せてみるよ」

と男の子は近く寄ってきて算数のドリルを手にする。

「お前さ、毎日ここで勉強してんの？」

「うん、お家じゃあまり集中できなくて」

「お前の家ってあのでっかい御屋敷だろ？。広くていいじゃん」

「広いからダメなんだよ？」

「ダメ？って何が？」

「広いとね、寂しいんだよ？」

「・・・お前、名前なんて言ってたっけ？」

「柄沙、月下柄沙」

「そうか、柄沙か。俺は刀弥」

「うん、知ってる」

再びなのけど同じクラスである。

「そうか、俺さ家に帰っても誰も居ないし暇だから勉強教えてやるよ！」

「本当？じゃあここ教えて欲しいな」

それから放課後になる度に刀弥君は毎日一緒に居てくれた。

居てくれただけで、勉強を教えてくれた訳じゃない。

刀弥君は勉強がまずそんなに得意じゃなかった。

だけど、教室に残って漫画を読んでいた。

私はその空間に居るだけで心が温かくなった。

窓から差し込むオレンジ色の光りが穏やかに体も温める。

温かい。温かいな。

「ん？何笑ってんの？面白いものでもあった？」

「うっん、なんでもないよ」

そして、夕日が沈む手前に勉強を仕方なく切り上げ。

言いたくないけど『じゃあね』と笑顔で言うて。

絶対その後には『また明日』と付け足した。

家に帰ると静かな自分の部屋へと入り、再び勉強に励む。

早くみんなに追い付きたくて。

そんなある日だった。

辞書が必要になったので祖父の書斎にある物を取りに行った時の事。

たまたま見つけてしまったもの。

それは、剣術の指南書だった。

「指南書を紐解くのはまだ先のお話なのですが・・・紫陽花荘に着いてしまいましたね」

と言った場所は紫陽花荘の玄関。

ずいぶんと長話をしてしまった様だった。

うまく話をまとめられないのは未だに頭が弱いという事もある。

しかし、うまくまとめられずとも私の過去に何があったのか・・・
と言つのは伝わったと思い、亜鞘さんの顔を見る。

亜鞘さんの顔は真剣に聞いていたので疲れた。と口に出さずとも伝わる顔、というか『はあ』と息をついていたのですぐに分かった。

「まあ、大方分かったわよ。ありがとね柄沙、話してくれて」

「いえ、むしろ聞いていただいてありがとうございます。さて、ご夕食の準備しますね」

「お願いするわ」

今日のご夕食・・・何にしようかな？

第16話 『初めて感じた事』（後書き）

追い追い亜鞘の過去も語っていきたいのですが・・・。

柄沙の過去もまだもうちょっとあったりします。

さて、この過去をどこで出せばいいのやら・・・。

感想など書いてくれると嬉しいです。

第17話 『変わらない意志の元』

「ふう」

再び白さが際立つ病室に一人、溜め息をつく。

ついさっきまで少し騒がしかったのが静寂を強調し、亜鞘と柄沙が来る前より静かな気がする。

「一体どうしたんだろうな・・・」

俺は右手に持つ黄緑色の物質紙マテリアルカードを見て呟く。

このカードは持ち主の性格を反映させて魔法を発現させる。

その際、その性格を象徴するような色が出る。

亜鞘なら赤、柄沙は確か・・・青色だった気がする。

俺は緑色だったのだが・・・。

「どう見ても黄緑だよな」

これは俺が変わったっていう事なんだろうけど・・・。

俺は鞆に手酷くやられて、イマリアは泣いて出てって、亜鞘と柄沙には心配されて。

いつものダメな俺のままじゃなか。

一体、何が変わったって言うんだよ。

「・・・・・・・・」

刀弥は窓の外を見る、夕暮れの紅が映える外を。

柄沙SIDE

ジリリリリリリイ。

けたたましい目覚まし音が鳴り響き、グッと手を伸ばし時計を探る。しかし、手はバフバフと布団の上を叩くだけで時計には触れなかった。

ジリリリリリリイ。

尚も鳴り響く時計。

止めたいのだけれど、体が全然目覚めておらずなかなか起きれないでいた。

そこにタッタッタと軽い足音を鳴らしながら近づいてくる音が聞こえる。

「ああ、もうまた起きてないじゃない……。柄沙！起きなさい」

亜鞘さんの声だ。と頭は理解するのだけれどそれだけで全然廻らなかった。

目覚まし時計を止めた後に、バサツ！と盛大に掛け布団を取られ、少し子供っぽいかもしれない犬のキャラクターが写っているパジャマがさらされる。

「ううゝああゝ・・・」

どこかのゾンビさながらの声を出しながら腕に力を入れて立ち上がる。

亜鞘さんはいそいそと私の布団を片付けてくれていた。

「それじゃ今日は私が朝食作るから、着替えたらすぐに来てね」

とタッタッタと軽い足音を再び鳴らし部屋を出て行った。

「んにゅう」

部屋にあるついさっきまで騒音とまで言える音を出していた時計を見る。

時間は7時きっかりだった。

顔を洗い、歯磨きをしてから着替える。

本で寝起きの口はばい菌だらけと知ってからは、うがいだけではなく歯磨きまでするようになった。

着替えは少々コネコネと手を動かすがてこずり時間がかかってしまった。

リビングに行くところはずでにトーストが置かれていて、亜鞘さんはすでに半分まで食べ終わっていた。

「今日はちょっと忙しくなるかもしれないから、しっかり食べといて」

と少し行儀悪いが食べながら喋る亜鞘さん。

忙しくなる？

どういう意味か理解出来てない、というのが顔に出ているのか亜鞘さんがタメ息をついた。

「今日は色々と調べる事があるでしょ？雨谷 鞆って奴の事もそうだし、イマリアちゃんの居場所も突き止めないと……。本当に忙しくなるんだからしっかりしなさい！」

「そうでしたね。いえ、分かっていたのですが……。あまりに現実味が無かったもので……」

「そりゃあ、現実味なんてないわよ。だって今でも信じられないもの、イマリアちゃんが無形だって」

けど、それが本当なら……。私達はイマリアちゃんをどうすればいいのだろう？

いや、そんなの考えるまでもない。

私達は刀弥様に嫌われたくないのだから。

本人には絶対に言わないけれど、クラスメイトより、先生より、家族より、世界中の誰より、私達は刀弥様に嫌われたくない。

だから刀弥様が悲しむような事は絶対にしない。

刀弥様がイマリアちゃんと一緒に暮らすというならば、それに肯定し補助しつづける。

このエゴだけは誰にも譲れない。

「でも、やらなきゃ始まらないじゃない」

「全くですね」

私は自分では小さいと思う口を思いつきり開け、パク！と勢いよくトーストにかぶりつく。

モクツモクツと食べているとチャイムになる。

「あたしが出てくる」

と亜鞘さんが駆け足に玄関まで向かっていった。

誰だろう？と思っていたと亜鞘さんがその方を連れてリビングの方まで戻ってきた。

「あつ、そのソファにお掛けください」

「悪いな」

入ってきたのは紫陽花荘を担当する先生だった。

なぜ、こんな朝っぱらから……。と思っていると大した用は無く刀弥様の容体とそれに至る経緯、そして、昨日の二人してのサボタージュの事だった。

「お前たちは無条件進級があるとは言え、基本的な学校のルールにはちゃんとしたがってもらいたい。ああも盛大にサボられたら、他の生徒に示しがつかなくなる」

その事は私自身も少し心苦しく思っていたので、素直に『申し訳ありません』と謝った。

亜鞘さんも私が謝ったのに続き『すいません』と謝る。

先生はその態度で納得したのか二回ほど頷いた。

「反省しているならそれでいい。では、私はこれで失礼しよう。朝食の邪魔をしたな」

「いえ、わざわざご足労くださいませありがとうございます」

「たまたま寄っただけだ。それとこれを渡すのを忘れていた」

と先生が取り出したのは……物質紙？

マテリアルカード

それを机の上に2枚置く。

「あの、これは・・・？」

と亜鞘さんがいぶかしむ。

先生は少し困った顔をして説明してくれた。

「これは見ての通り物質紙だ。ついさっき話に出た無条件進級の依頼のもうひとつの報酬だ」

「ああ・・・これが」

あまりに色んな事があつたために忘れていたが、そういえばあの依頼に『村長からの特別報酬あり』とかかれていた。

「しかし、物質紙が2枚もあつたって使えないんじゃない・・・？」

「その通りだ」

先生は嘆息する。

「本来なら原則1枚な訳だが、これが手渡されるのが許可された・・・という事は単純に予備だと思っていい。しかし、くれぐれも2枚同時に使おうとするなよ？」

先生は少し『同時』という所を強く言った。

それには理由がある。

この物質紙は人格を投影し魔法を発動する。しかし、それ故に魔法を同時に使う事が出来ない。

もし仮に2枚の物資紙を使おう物なら、心が割れてしまっからだ。

一度割れてしまった心は二度と元には戻らない。

そして心が割れてしまった者は、意識を失い、ただ息をするだけの植物人間になってしまう。

これは実例があるらしく、その者は今も生きてはいるが意識は戻っていないらしい。

いや、恐らく二度と戻らないだろう。

だからこそ、物質紙は1枚なのだ。

「分かりました。ではありがたく頂戴します」

「それじゃ私は戻る。無条件進級とは言えちゃんと学校には来るんだぞ」

『はい』

最後に念を押された。

まあ、どちらにせよ学校の制服を着ていたので先生にとっても杞憂だろう……。

それに、今日は学校に行く必要すらある。

刀弥様・・・。

「刀弥様・・・。」

「え？何か言った？」

「あつ、いえ！」

いつの間にか声に出してしまったみたいだ。

私は・・・本当に刀弥様が居ないと何も出来ないのですね・・・。

改めて思う。刀弥様が私を気にかけて理由。

それはきつと、たまたま学校に残ってたとか、同じクラスだったとかが理由なんかじゃない。

きつと、同じだったのだと・・・。

小さい頃に刀弥様に何があつたのかは分からない。

それは刀弥様自身に記憶が無いから・・・。けど、本当はそれだけじゃない。

私が怖がっているだけ。

私は刀弥様に自分の過去を話した。

それは私を知ってもらいたかったため。

でも、私は刀弥様の過去を聞いていない。正確には記憶が無いという事しか聞いていない。

それは私が嫌われたくないため。

きつと、釣り合わないのだ。

刀弥様は幼い時に拾われた。その時にはすでに衰弱していたらしく、すぐに病院へと運び込まれた。

刀弥様はすぐに目を覚まされたらしい。

その後、記憶障害が分かり精密検査を受けたらしい。

その時の医者曰く。

刀弥様の記憶障害は本能的な物らしい。

それがどういう意味か・・・簡単な事。

本能的に記憶を消さなければ生きてはいけなかった・・・という事だ。

そんなの、私と釣り合うとは思えない。

過去であるというだけの共通点で聞ける話ではない。

私は私が生きている証拠に記憶がある。

それが刀弥様には無かったのだ。

親も分からない、自分が誰かもその場所がどこだったのかも・・・。

私が聞きかじったのは所詮その程度の物だ。

ある程度の推測は混じっているが、その程度だ。

刀弥様はその過去を話された時『お前は信用してるから話してるんだからな』と耳を赤くして話されました。

今、思いだせばあの時の刀弥様はすごい可愛かったです。

きつと、あの時でも今でも否定なさるのでしょうか・・・。

「んじゃ、あたし達も学校行きましょ！」

「はい！」

待っててください、刀弥様。

刀弥様は絶対に悲しませんから。

第17話 『変わらない意志の元』（後書き）

テストやら文化祭やらで相当の日がたってしまいました。

というのは本当ですけど・・・本当なのですけど・・・。

すいません!!。Rewriteにはまっていました!!。

小鳥END感動で涙腺ピンチです。

第18話 『三人の始まり』

亜鞘SIDE

ほんのり温かい通学路。

朝も早くから日差しが差し込むおかげだ。

こんな日は常々眠ってしまいそんな誘惑に誘われるのだが、今日は頭が冴えていた。

と言っても今回はその冴えが勉強に向く事も無く、学校に着くや教室にも行かずに依頼掲示板を見ていた。

「うっ……ん」

じつくりと依頼の一つ一つを見ていく。

『空を飛ぶ無形の討伐』

『二足歩行する無形の討伐』

『森に出没する謎の無形の調査』

上から下まで見て行った結果、恐らくイマリアちゃんに関係がありそうな物はこれくらいのもんだろう。

最後に関しては“謎”なのでどうとも言えないが……。

しかし、手掛かりをつかむにもまずは行動だ。

空を飛ぶ無形の依頼書の詳細を見て見る。

『近頃、村の畑の野菜や果物が何者かに盗まれる事件が多発している。原因を調べようと見張らせた所、その野菜を盗んでたのは異様な形をした羽根の生えた無形だった。早くてどんなのか分からなかったらしいが無形なのは間違いない。即行でその無形を討伐して欲しい』

まあ、内容もその題名の通りの様だった。

けど・・・早すぎて分からないって程の速度が出せる無形か・・・。

話を聞いてた限りだとイマリアちゃんはちゃんと飛べた様だけど、ゆっくり音が離れていったって刀弥が言ってたし・・・。

すぐに飛ぶ事なんて上達のするのかしら？

一旦これは可能性として保留かな・・・。

当然ではあるが報酬は全く目に入って無い。

目的が決まっているのだから、ただあたしはそこに向かって行けばいいのだ。

だから・・・。

今、器用にも依頼書を片手に眠っている柄沙はきつと無視していいのだ。

朝弱いからって・・・これはどうなのだろう・・・。

っていうか多分眠れなかったんだろうな。

刀弥が居なかったから・・・。

もしかしたら刀弥は柄沙にとって枕みたいな物かもしれない。

なんというか、枕って有ると安心して眠る事できるし・・・。

きつと柄沙は刀弥が居なくて安心出来なかったんじゃないか。

だったら、今くらいはそつとしてあげるべきよね。

さて、2枚目の二足歩行する無形・・・。

『最近、人通りの少ない道で無形に襲われる事件が多発しているんだ。今のところ怪我をした人はいないらしいんだけど。その無形は何でも食べ物を奪ってから逃げる時に二本の足で逃げるらしい。どうにも不気味だから早く討伐してほしい』

ざっと見たところ、これが一番可能性が高い。

が、しかし。

これがイマリアちゃんだとすると本当にマズい。

もし完璧な人型の無形が居ると知られたら、この世界にきつと悪い衝撃が走るのには目に見えてる。

誰が無形かもわからない状況など、一般人からしたら気が気じゃないだろう。

魔法使いであるあたしたちでも苦しめられる。

だが、そんな事よりも問題なのは。

イマリアちゃん自身が殺されてしまう事。

それだけは絶対に避けなければいけない。

「うむう・・・」

これは空飛ぶ無形よりは優先順位を上にはせざるを得ないだろう。

さて・・・。

柄沙がよだれ垂らし始めたけど・・・もう、ガン無視でいいよね。

最後に森に出没する謎の無形。

これは可能性が無いわけでは無いから視野に入れるつもりだけど。

えーっと・・・。

『えつとね、近くにあるでつかい木の上に人が居たと思ったんだけど、次に見た時にはその人に翼が生えててどっかに飛びたっちゃったんだ。誰かの魔法かもしれないけど、念のために調査してくれないかな?』

「・・・・・・・・コレじゃない？」

いやいやいや、だってすでに人から翼が生えてる所目撃されてる前提だし・・・・・・・・。

二足歩行の可能性も否めないんだけど。こっちもだし。

「ん・・・・・・・・」

「ハッ！」

「ど・・・・・・・・どうしたの？」

いきなり柄沙が目を見開いて顔を上げる。

そのいきなりの挙動についてビックリしてしまった。

「あつ・・・・・・・・いえ、私・・・・眠ってました？」

と口元のよだれを拭きながら聞いてくる。

いや、もうフォローとか出来る訳では無いし。元よりするつもりもないけど・・・・・・・・。

「そうね、爆睡だったわね」

「そ、それは・・・・・・・・お恥ずかしい・・・・」

と顔を両手でふさいでしまう。

この子は基本的にしおらしいのがよく似合う。

笑顔が可愛いのはもちろんなのだけど、少し憂いでいる顔の方が周りを魅了するかなのような美しさを醸し出す。

今のこの動作も狙ってやってるのでは無いかと、つい思ってしまう。

まあ、柄沙がこんなの狙える訳ないのだけど。

とりあえず、可能性が高いのは二足歩行の無形の討伐と森に出没する謎の無形の調査。

「討伐と調査か・・・」

「そろそろ授業が始まってしまいます。教室に戻りましょう」

「そうね」

あたしは柄沙とはクラスが違ったためいつもクラスでは一人だ。

悲しくは無かった。休み時間になれば柄沙や刀弥に会っていたし、先生に呼びかけられたりはする。

だけど、寂しくはあった。

クラスに一人というのはただ無意味な時間を過ごしているようにしか思えなかった。

時折聞こえる女子の陰口、嫉妬。時折刺さる男子からの嫌悪の視線。

そして、共通に存在する畏怖の感情。

その全てに当てられるこのクラスは、あたしにとっては居心地の悪い事この上無かった。

常々早く時間が過ぎないか、と思う日々。

今日もそれは変わらない。

クラスに一人、周りには誰も寄せ付けず、ただただ窓の外の世界を眺める。

柄沙には私以外の友達もいる。

多分、私と同じなのは刀弥だけなんだ。

いや、それは言い訳、これはただの依存。

分かっているそれはただの甘えでただの期待。

あたしは刀弥じゃないし柄沙でもない。

他の誰でもない。

だからこそ、刀弥に。

刀弥ただ一人に、ただ選んでほしい。

はぁ・・・あたしもいつの間にか立派な乙女な感情もっちゃってるわね・・・。

学校に入ってしまったらしくして、あたしは特出した才能によりAランクの称号を貰った。

この学校のランクは昇格もあれば降格もある。

当然だ、魔法によるランク付けなのだから、魔法が変わってしまえばランクも変わる。

あたしがその時持っていたのは魔法は今もある『エアークンデインション空気調整』そして『エレメント・プロミネンス原素の炎』。

この魔法はランクAが授けられる程強力だった。

炎を出現させ、それを自由に動かせる。

この時のあたしは最強なんかに興味無かった。しかし、強くなることにしか興味も無かった。

全ては復讐。

そのためにあたしは強くなろうとした。

その頃にはすでにあたしの周りには誰も居なかった。

当り前だ。

その時のあたしは完全に弱者を見下していた。

自分が見下してるのも気付かずに見下していた。

依頼掲示板の前でどの依頼にしようか迷っている者に対して『邪魔』
と言いつち。言い寄る物全てに『雑魚のくせに』と罵った。

当然のように目を付けられたが、原素の炎の圧倒的な火力で燃やしつつくした。

この学校では月に一回生徒同士で戦う『マジックマッチ』が存在する。

学年で区切られてはいるが基本トーナメント戦で全員参加。

そのため体育館、グラウンド、闘技場をフルに使う。

人数が人数だけにこのイベントは3日間通して行われる。

中には長引いたりする試合も当然あった。

しかし、あたしの試合だけは1分と掛からなかった。

あたしの試合には相性すら関係無かった。

相手は水の針を飛ばす魔法を使ってきた。

それは炎を使うあたしにとっては最悪の相性ともいえる。

なのに相手は一分と持たなかった。

圧倒的。その言葉が似合う光景であつただろう。

相手の飛ばす水はあたしに当たる前に全て蒸発する。

どれだけ数を飛ばそうと一本たりともあたしには届かなかった。

動き回る相手に合わせて炎を動かし、徐所に近づけていく。

逃げまどいながらも水を打ち続けるが結局、最後には相手から降参する始末。

つまらないと思った。

これなら依頼でもしてた方が全然有意義だとも思った。

しかし、学校のイベントのためマジックマッチを抜けれずにいた。あたしは先生からの信頼は厚かったから、それを簡単に裏切ろうとは思わなかった。

そして二日目の相手に選ばれたのがその年最弱と言われる月下 柄沙。

観客などほぼ全く居なかった。まあ当然あたしが勝つという事が目に見えていたからだ。

こんな試合を見るくらいなら他の試合の方がよっぽど有意義だろう。

相手である月下はあたしの知らない男子と喋っていた。

余裕がある訳では無いのだろう。むしろ負けると分かっている前提で居るのかもしれない。

何ともやる気が出ない。

「柄沙、お前本当に大丈夫か？相手はランクAの魔法使いだぞ？」

「何を弱気になっているのですか？大丈夫です刀弥様。これは試合なのですから」

「まあ、そうなんだけどさ……。お前だったらちよつと熱せられただけですぐに倒れそうだからさ」

「それはさすがに言いすぎです。私だって夏くらいは氷菓子と団扇と氷枕と氷魔法で凌いで見せます」

「めちゃくちゃ道具に依存してるじゃん！」

「何をおかしな事を……。道具は使うためにあるんです！」

「その通りだけど……。っていうかそのままだと結局熱せられたら倒れるじゃん！」

「それはまあ……。致し方ありませんよね？」

「すでに負けフラグ」

何とも五月蠅い。

「その雑魚達！とつと試合始めるわよ。こんなつまらない前哨戦にもならない試合、早く終わらせたいし」

「……………」

返された答えは無言だった。

無言だっただけなのになぜか心がざわつく。

どうせ大した力も無いはずだ。なのに無償にイラつくのは何故だろう？

「そうですね、では刀弥様。行つてまいります」

「ああ、行つて来い」

あたしと月下は闘技場で睨みあう。

月下の目はさつきまでとは全くの別物、と言っても過言じゃない程に鋭くあたしを捉えていた。

その月下の手には物質紙と竹刀。

このマジックマッチは武器の所持が可能ではあるが、当然殺傷能力の高い物は禁止となっている。

その選別で木刀はダメだが竹刀は良いという微妙な所で落ち着いているのは今だに謎だ。

金属の含まれる武器は基本禁止。

基本的に使えるのは竹刀、杖、鞭、木製のメリケン、木製のブーメランなど。金属が含まれて使える武器はヌンチャクくらいの物だろう。

だから月下は竹刀を持って立っている事に関しては別段問題があるわけではない。

しかし、あたしは竹刀を構える月下を見て少し、ほんの少し怖気づいてしまった。

その事に自分で気付いた時、あたしは自分が許せなくなり、苛立ちは増していった。

「・・・・・・・・」

平然と構える月下を睨みつけながら試合の鐘を待つ。

その鐘の音は1分もたたない打ちに鳴り響いた。

第18話 『三人の始まり』（後書き）

今更ですが世界観皆無ですよね……。これ。

世界観皆無っていうか世界設定全くないですよ。

なんというか自分でもあきれるばかりと言うか全く……。

もうちょっと話を煮詰めてからの方が良かったのでは無いかと今更ながらに思ったりします。

いやぁ……。後悔って本当に先に立ちません。

感想など頂けると作者は号泣のあまり水たまりを作ります。

第19話 『付けられた不名誉』

亜鞘SIDE

あたしと月下はそれぞれ武器を、あたしは物質紙を柄沙は竹刀を構える。

鋭い眼光は今だ反らす事なくあたしに向けられる。

それはすでに試合開始の鐘が鳴ってから30秒経つ。

月下はカードも出さずにただ真っ直ぐに竹刀を持つだけで全く動かない。

「ねえ、あんた物質紙は？」

「・・・今のところ必要ありませんので」

「ふうん」

今のところか・・・。

「私の事より、そちらは何故動かないのです？」

「そんなの決まってるじゃない。ランクE程度の魔法なんてあたしには無意味って事を知らしめるためよ。それでも時折勝負、いや喧嘩をよく吹っ掛けられるから。こんな圧倒的に勝てる試合は見せしめには丁度いいのよ」

「そうですか。それは残念です」

そう言うとも下は竹刀を下げて、片手で持つ。

もう片方の手には物質紙。

「へえ。何もしてないのに、もう必要な時な訳？」

月下は動じる事も無く、何とも無いと言う如く。

「ええ」

と答えた。

「私は勝たなくてはならなくなったので。頼みます」スノーフェアリ「雪女」

月下は青色に変色した物質紙を持って唱える。

宣戦布告と一緒に。

「ランクEがぼざくんじゃないわよ！」エレメント・プロミネンス「原素の炎」！」

深紅の物質紙から現われる炎。

その炎は形を変え、まるで蛇が巻きつくみたいな形になる。

この形には当然意味があり、奇襲や全方位などの攻撃に対しての牽制になる。

戦闘準備が出来、月下の方を向く。

月下は再び竹刀をまつすぐに構えている。

そして、その横には着物を着た小さな女の子がふよふよ浮いている。

あれは単純にそのまま召喚魔法。

使える物が少ないレア度の高い魔法・・・のはずだ。

なのにランクE？

「疑問に思っているようですね」

心を見透かされているのかと思うが、違うと自分に言い聞かせる。

あれは当然の疑問。これは揺さ振り。相手を動揺させるための台詞。

「ふう。そうね、レア度が高い方の魔法なのに・・・なんで？」

「ご自分でお考えください」

・・・イラッ。

「あんたムカつくは。焦がしてあげる！」

「出来るものなら」

「やってやるわよ！」

あたしは炎を月下に向けて飛ばす。

炎は月下のすぐ横を通る。外した。

闘技場に居た数少ない観衆はざわついた。

『外した?』『いや、わざとだろ』『いたぶるつもりかよ』

様々だが違う。

かわされた?。

いや、驚くべきはそこじゃない。本当に驚くべきは炎をかわす挙動が見えなかった事。

「どうしたのですか?」

月下は何食わぬ顔で構えている。

「チッ」

舌打ちをしつつも飛ばした炎を操り、後ろから、横から上からと様々な方向から襲わせる。

飛ばすごとに速度を上げる。普通の魔法使いならばこの時点ですでに攪乱され、反撃する事も無く炎に直撃する。

しかし、月下は最小限の動きで冷静に炎との距離を取る。

それも視界に入っていない炎さえもたやすく避ける。

「どうなってるのよ!」

「何を焦っているのです?」

いや、冷静に考えよう。相手はほとんどその場から動いていない。

恐らく攻撃の手を緩めてないからかわすので精一杯という事だ。

涼しい顔をしているが反撃出来ずにいるのはかなり精神的にキツいはず。

このまま攻撃し続ければ最初にあの男、刀弥だっけ?が言ってたように熱で体を蝕むはず。

なら、大丈夫だ。行ける。

召喚された雪女も月下のそばから離れていない。

本来召喚魔法で出した使い魔は単独で突っ込み、後方で使用者が支援するのがセオリーだ。

まあ、見るからに戦闘能力の無さそうな使い魔なのは言うまでもないけど。

陽動にすら出来ないというのは正常に判断出来ていないはず。

このまま行けば当然あたしの勝ちだ。

結局のところランクEがランクAに勝とうなど無理がある。

マジックマッチとは言えここまで格差のある勝負を設定されるとは思わなかった。

今までの奴に比べればいくらか骨があったけど、もう勝負はつくはずだ。

「・・・・・・・・・・」

ゴオオ、ゴオオ、燃え盛りながら月下めがけて飛びまわる。

それをあんな近くでかわしていればそう長くは持たないだろう。

だが、あたしのその予想は大きく裏切られ5分経過する。

「なんでよ！、なんで倒れないのよ！」

「それは当たっていませんので」

「そんな問題じゃない！。あたしの炎は約1000℃1200℃。そんな物が5分も周りに飛んでたら熱中症や脱水症状、更には酸欠だってあり得るわ」

そうあり得るはずなのだ。なのに何で。

「あんたは平然と立ってるのよ！」

「そうですね、勝てましたらお教えしましょう」

「ああもう！あんたのその言い方もイラつくし、攻撃はしてこないし、炎はかわされるし！！！」

どうやったら炎を当てれる？。数を増やす？、速度を上げる？サイズを変える？。

「ええい！こうなったら全力！」

物質紙からもう一つ大きな炎を生み出す。

炎の操作には最低限片手を使うので数は二つが限界だ。

次に速度。

形を丸ではなく少し横に長くした楕円形にする。

空気抵抗を減らせば速度を増させる。

最後にサイズ。

月下は僅かな動きで炎をかわしている。なら僅かな動き程度では避けられぬ様にすればいい。

炎をどんどん肥大化させる。

その直径は人の身長くらいはあるだろう。

「あなたは弱いんですね」

「弱く無い！あたしはランクAの魔法使い、万丈ばんじょう亜あ鞘さなんだから！弱いはずが無い」

そつだ弱くない。弱くてはいけない。

両親を殺した無形を殺すまでは。

「何があつたか知りませんが。それでは私には勝てません」

「うるさい！うるさい！。こんなの勝負にもなつてないのよ！」

「そうですね。これは勝負ではありませんね。ただの御遊戯です」

「燃え尽きなさい！！」
エレメント・プロミネンス
“原素の炎！！”

二つになつた巨大な炎が飛び交う。

周りの温度だつてついさつきとは比べ物にならないだろう。

炎が大きくなつた事で月下も大きく動く必要があるのだろう。

ほとんど動いているようにも見えなかつた月下の動きが大ぶりになる。

そして、1分もたたずに汗をかいているのが目に取れた。

しかし、これほどまでの魔法を何分も使えば魔法核にある魔力も枯渇する。

もうちょっと抑えるべき？いや、これで抑えてしまえば汗一つかかせる事は出来ない。

「だいぶ・・・お疲れと・・・見えます、が・・・。大・・・丈夫、

ですか？」

炎をかわしつつも話しかけてくる月下。

その行動はまだ余力があると思いこまされ、徐々に亜鞘を追い詰めていく。

「あつ」

それは集中を切らした亜鞘の声だった。

実際切らしたのは一瞬ですぐに方向を変えようしたのだが失敗した。

炎はほぼ同時に月下めがけ飛んだ。

それを月下は変わらぬ行動で避ける。

避けた事により二つの炎が重なり、膨れ上がる。

そして、爆発する。

莫大な熱が闘技場を覆う。

「柄沙あああー!!」

月下と一緒にいた男が叫ぶ声が聞こえる。

しかし爆発により闘技場は煙が立ち込める。

正直、ここまでするつもりは無かった。

多少の怪我はイベントの内容が内容なので多めにみられるとは言え、やりすぎた。

「だけど、これなら流石に」

「流石に・・・なんでしょう？」

「えっ」

声がしたと思つた時にはすでに距離は詰められていた。

「“淡雪”」

トンツ、と軽く竹刀で突かれる。

突かれた事で後ろに倒れる。

「何、これ・・・動けな・・・」

「そういう剣技ですので」

ピイイーーーーー。

試合終了のホイッスル。

煙が風に流され露わにされる敗北。

「あたし、負けたのね。で、なんであたしの炎で倒れなかったの？」

「この子のおかげです」

と月下は使い魔を指差す。

「この子が出る事は一つ、冷やす事。それにより私の周りを常に冷やしていただいていたのです。しかし、それでも最後の炎は熱過ぎでした。もう、動けますよね？」

月下は倒れているあたしに手を伸ばす。

「一つ撤回させてもらいますね。あたなは強いです」

そついう彼女は最初からあたしに向けていた鋭さは無く。

目じりが少しタレていて、穏やかな、まったりとした顔をしていた。

「完敗ね」

「ちょっと、待ってもらおうか！」

そこに割り込んできたのは先生だった。

先生は私を少し見た後、不機嫌そうな顔で月下を見る。

その顔は聖職者が生徒に向けてむけるような物ではなかった。

「君、今の不正しただろう」

「えっ？」

「・・・・・・・・」

あたしは驚き、月下は黙った。

「あの熱の中、倒れないのもおかしいし。かわし続けてるのだって
そうだ。ありえない！」

先生は闘技場全てに聞こえるように大声で言っているのだろう。

この先生は特に成績、実力。そして魔法のランクに関して拘っている
事で有名だ。

だから出てきたのだろう。

ランクAがランクEに負けるなどという事が起こってしまったため。

だから不正と言ったのだろう。

それを認めたくないため。

『そうなのか？』『まあ、ありえないよな』『マジで不正？』

闘技場の空気は淀み始めた。

「勝手な事言っんじゃないやねえ！！！」

刀弥と言われていた人が叫ぶ。

闘技場の淀んだ空気はすぐに凍らされた。

「ついさっきの試合のどこに不正があつたて言つんだよ！」

刀弥は舞台までやってきた。

「柄沙、大丈夫か？」

「ええ、少し疲れました」

「だから言つただろう！ありえないと！」

「だから、何がありえないんだよ！」

「万丈の魔法が途中で狂つたのもおかしいだろう。何か弱みを握っているとは思えない！」

「柄沙がそんな事するはず無いだろう！」

「何を根拠に！！！」

男は齒軋りしながら拳を握る。

直観的に分かる。これはもう止まらない。

きつとこの男にとって月下は大切な人なのだろう。

大切だからこそ、傷つけられるのが、汚されるのが耐えられないん

だ。

男は拳を大きく振りかぶる。

「ダメです！！刀弥様、おやめください！」

柄沙がその腕を抱きしめ抑える。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「月下も否定せんという事はそういう事なのだな・・・フン、この面汚しめ」

ブチッ。

「あんた！いいかげ」

メコッ！

あたしが文句を言いかけた時にはすでに刀弥が動いていた。

大の大人を一発でのすほどのパンチを顔面に。

「ごめん、柄沙。止められなかった！」

「・・・はい」

問題を起こしたというのに月下は嬉しそうだった。

自分のために怒ってくれた事がよく分かる。

見ていても痛快だった。

「あつ、ほら起きろよ」

と手を差し伸べられる。

「お前も柄沙のために怒ってくれてありがとうな。途中で止めちゃう形になったけど、ちゃんと聞こえてたから」

「ええ、万丈さんありがとうございます」

柄沙も気を取り戻し手を差し伸べる。

「亜鞘」

あたしは二人の手を取る。

「万丈 亜鞘。次からは名前でいいから」

「そうか、よろしくな亜鞘」

「よろしくお願いします」

あたしは少し変わった気がした。

この事が原因で刀弥には『先生を殴り倒した』と言うレッテルが張られ学校で恐れられる事になる。

第19話 『付けられた不名誉』（後書き）

とりあえず、主人公が学校で嫌われている事の辻褄合わせ完了！

戦闘シーンは戦闘シーンらしくない気がします。

なんか地味です。

感想御待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6016t/>

最強ときどき最弱。

2011年11月18日09時36分発行